

太平天国の南京統治と江南大営

菊池秀明

はじめに

よく知られているように、太平天国は洪秀全とキリスト教の出会いがきっかけとなって生まれた。彼は「皇帝」の称号を神である上帝やハウエに対する冒瀆と見なして否定し、清朝の打倒をめざして蜂起した。太平天国は「上帝のもとでの一大家族」という理想を掲げ、始皇帝以前の中国に見られた複数の王からなる新王朝を作ろうとした。

すでに筆者は一連の著作によって、太平天国が発生した社会背景と広西での蜂起、南京への進撃、北伐と西征の歴史などを明らかにした¹⁾。それらは従来の研究では不明だった前期太平天国の実像について多くの事実を解明したが、太平天国が首都とした南京一帯での政策と社会変化、長江兩岸に展開した清軍との戦闘、上海に進出していたヨーロッパ諸国との交渉、新王朝の内部分裂となった天京事変に至る過程などが今後の検討課題として残された。

本稿が取り扱うのは太平天国の南京における統治体制と江南大営を設けた清軍との戦いである。太平天国は聖庫制度や『天朝田畝制度』の理念に基づき、戦時色の強い公有制を実行した。それは農業社会主義の性格が強く、一律な「平均」化を推し進める抑圧的な体制だったと言われる。また南京の社会は「上帝のもとでの一大家族」という上帝教の宗教的理念を実現する場であったが、実際には厳格に等級づけられた官僚制度によって非効率的な物資の管理や分配が行われた²⁾。

こうした相矛盾する側面をどのように考えればよいのだろうか。近年中国では新たな史料集が刊行され、従来見ることの出来なかった史料を参照できるようになった³⁾。また筆者は台湾の国立故宮博物館で多くの檔案史料を収集し、これを中国で公開された史料集、中国第一歴史檔案館所蔵の檔案史料と対照させる作業を行った。本稿はこれらの史料を利用しつつ、1853年の南京到達後、翌54年初めまでの南京およびその周辺における太平天国について考えてみたい。

1、太平天国の南京における統治体制

(a) 洪秀全らの南京入城と諸王府の設置

1853年3月に南京を占領した太平天国が最初に行ったことは、「搜妖」即ち清軍將兵や清朝関係者に対する摘発だった。張汝南『金陵省難紀略』によると、旗人居住区だった内城陥落後の3月21日から太平軍將兵が家々を訪ね、短刀を手に「妖か?」「妖を匿っていない

か？」と詰問した。人々は清朝の頂戴や服、官印などをあらかじめ隠しておいたが、徹底した捜索で見つけられてしまった。また隠しておいた金銀も多く没収された⁴⁾。

城内に隠れた清軍将兵の捜索が終わった3月29日、天王洪秀全らは南京へ入城した。欽差大臣の向榮は南京から脱出してきた住民の話として、その様子を次のように報じている。

洪逆（洪秀全のこと）が入城した時、三十六人が大きな轎を担ぎ、四面を黄色い綾で覆っていた。路傍の住民には皆ひれ伏すように命じて、仰ぎ見ることを許さなかった。

楊逆（楊秀清）が出かける時も、十六人で轎を担ぎ、轎の外側はやはり黄綾で覆った。前後には太鼓や銅鑼を奏でる者が十数人連なり、牌刀手、儀従と呼ばれる護衛が二里（約一キロ）余り続いた⁵⁾。

また滌浮道人『金陵雜記』によると、洪秀全の行列には戈や矛を手にした護衛が数千人ついた。東王楊秀清の護衛はみな「黄心緑辺」即ち黄色にふちが緑の旗を掲げ、チョッキ（号衣）にも同じ色を用いた。北王韋昌輝の旗と部下のチョッキはみな「黄心黒辺」で、翼王・左軍主将である石達開のそれは「黄心藍辺」だった。この旗やチョッキの色分けについて、東王の「東」、翼王の「左」は共に五行思想の「木徳」に属するため、旗や衣服の色に緑と藍を用いると述べている。また韋昌輝の「北」は「水徳」に属するため、旗の色にも黒を用いるのだという⁶⁾。いっぽう黄色は「中央」を表し、皇帝を表す色であるが、地上の君主が皇帝を名乗ることを禁じた上帝教の教義から見て、まず上帝ヤハウエ（或いは上帝の子としての洪秀全）を意味した。これら諸王の旗や護衛の服には上帝の庇護のもと「五方」である天下を我が物とするという意図が込められていた⁷⁾。

洪秀全らの入城後、南京は天京と改称され、王たちはそれぞれ王府を構えた。洪秀全の天王府は旧両江総督の衙門を拡張して作ったもので、周囲は高く厚い壁に囲まれ、その外側には深い濠が掘られた。太平天国の滅亡時に多くの建物が焼かれたため、残っているのは庭園のあずまやなどに過ぎない。当時は南端に照壁（目隠しの塀）があり、次に上帝を祀る天父台があった。洪秀全は誕生日の時などに楊秀清と共にここに登って上帝を祀った⁸⁾。

続いて宮殿を囲む濠にかかった橋を渡ると天朝門（鳳門）があり、「大小の衆臣はここで歩みを止めよ。詔があつて初めて進むことを許す。さもなければ即刻斬首」⁹⁾と記された金色の緞子がかけられていた。そこから奥へ進むと聖天門があり、洪秀全が執務した金竜殿があった¹⁰⁾。金竜殿の奥には天兄基督殿、天父真神殿があり、さらに洪秀全の私的な生活空間である内宮がある。ここで洪秀全は一千名余りの女官、多くの妃に囲まれて暮らしていた¹¹⁾。

なお向榮は先の住民の話として、洪秀全はすでに死んでおり、木の偶像に衣冠を着せて天王府に安置している。楊秀清は7日に一度会いに行くが、他の者は会うことが出来ない。そもそも洪秀全が南京へ入城した時、その顔を見た者は一人もいなかったと報じている¹²⁾。永安州時代も洪秀全は人前に出ることが少なかったが、南京到達後も太平天国の実行した政

策を積極的に主宰することはなかったと考えられる。

次に城の西側には楊秀清の東王府があった。楊秀清は初め内城にあった杭州將軍の衙門に王府を設けたが、清軍が城の東側から砲撃を加えたため城西の黃泥岡へ移った¹³⁾。その規模は天王府には及ばないが、やはり壯麗なもので、「東西対峙して互いに拮抗し、誰が臣で誰が主であるかわからない」¹⁴⁾と言われた。門を入ると承宣庁、參護庁と呼ばれる官庁があり、東殿尚書とよばれる六部の尚書 72 名を中心とする行政機構を持っていた¹⁵⁾。楊秀清は外出時に黄一色の衣装に身を包んだが、目に病気を抱えていたため「極大の墨晶鏡」を掛けた¹⁶⁾。

また韋昌輝、石達開も小規模ながら北王府、翼王府を開き、それぞれ六部尚書などを置いた¹⁷⁾。すでに死亡した蕭朝貴の長男である蕭有和は幼西王に封ぜられ、西王府を設けた¹⁸⁾。馮雲山の家族は蜂起に参加出来ず、清朝側に捕らえられるか、上海まで来たものの合流は果たせなかった。そこで馮雲山の死後は蕭朝貴の次男である蕭有福が跡を継ぎ、南王府を建てた¹⁹⁾。さらに 1854 年に蜂起前から平南県、桂平県白沙地方の上帝会指導者として度々功績をあげた胡以暘、秦日綱の二人が豫王、燕王に封ぜられると、彼らも城内に王府を置いた²⁰⁾。

これらの王府は楊秀清以下の諸王も新王朝の統治者の一人であり、世襲的な権力を認められたことを示していた。簡又文氏は永安州時代の太平天国が天王と五王による「共有共治共享」の性質を帯びており、楊秀清以下の王は小説などに登場する「一字並肩王（皇帝と比肩する王）」に相当すると述べた。また洪秀全を含む六人は尊卑の違い、職の上下があるものの、身分としてはみな国主であり、「実に開闢以来いまだ無かった怪異の政体である」と評した²¹⁾。南京における諸王府の設置は、こうした体制が継続していたことを示しているが、以後楊秀清の権限が突出するにつれて矛盾も拡大することになる。

(b) 天京における住民の組織化と管理

次に天京の社会について見たい。南京占領後に楊秀清は布告を出し、「誰もが天父を知り、天王に帰順して共に天下を取り、天の福を受けよ」と住民に呼びかけた。幹部が進駐した家々の門にも、「早く、早く来て上帝を拝め」と人々に上帝を崇拜するように促す文字が記された²²⁾。また「安民」を宣言して將兵に殺人を禁じ、人々に進貢を求めた²³⁾。

続いて南京の住民を男館、女館に分けて収容する組織化が始まった。家族は引き離され、男性は 25 名が 1 組となって、「新兄弟」として両司馬（主に湖南、湖北人）の統率を受けた²⁴⁾。家に帰ることは許されず、帰れば女性と密会したと見なされて殺された²⁵⁾。また住民の登記票である「門牌」の制度が設けられ、毎月館内の人数を上官に報告した²⁶⁾。両司馬の上には卒長、旅帥、師帥、軍帥などの廣西人將校がおり、さらに総制、監軍と呼ばれる上級將校が統括するのは軍の制度と同じだった。壯年男子は牌面、それ以外の者は牌尾に分けられ²⁷⁾、所属を示す黄色い布を服に縫いつけて部隊に編入された²⁸⁾。

女性も「新姊妹」として 25 名ごとに組織され、廣西人の女性幹部（牌長や軍帥）に統率

されて陣地構築や濠に張り巡らす竹棒の加工作業、南京に到着した食糧を聖庫へ運び込む作業などに従事した。纏足を禁止する放脚令が出され、従わない者は鞭打ちや首かせの刑を受けた²⁹⁾。城内各地に女性集住区である「女営」が作られ、男性がここに入ることは厳しく禁止された。親子や夫婦であっても館の外から顔を見るか、大きな声で短く言葉を交わすことしか許されず、密会する者は巡査と呼ばれる監視官の摘発を受け、天条を犯した罪で殺された³⁰⁾。

また南京の場合特徴的だったのは、様々な物資を製造、管理する「匠営」「典官」と呼ばれる機関や役職を設けた点であった。

元々太平軍は軍内に水営（水軍）や土営（工兵部隊）を置き、武器や火薬を製造していた。南京到達後はこれに加えて建築作業を行う瓦匠営、木工師からなる木営、金属製品を作る金匠営、南京の特産であった織物職人を集めた織営などの職人集団を設けた³¹⁾。典官の種類は多岐にわたり、典聖糧、典聖庫のように食糧や物資の管理と調達に当たる者がいた³²⁾。また生産および分配に携わる者がおり、大砲と弾丸を造る典砲衙、鉛碼衙、火薬を製造する紅粉衙、王や将校の衣装を作るための典織衙、縫衣衙などが置かれた。

日用品を製造する組織も多く設けられ、銅匠衙、典竹衙、典石衙はそれぞれ銅、竹、石細工を行う職人を集めた。また食品を扱う部署として油と塩を扱う油塩衙、穀物の脱穀を行う舂人衙、家畜の屠殺を行う宰夫衙、飲茶の点心を作る茶心衙などがあった。さらに詔書や官印の製造、書籍の出版をつかさどる鐫刻衙、刷書衙があり、「百工衙」と総称された³³⁾。

これらの部署は「百工の技芸は帰する場所があり……、軍中で必要な物資は立ちどころに備えられた」³⁴⁾とあるように、技能をもつ人々を効果的に動員することが出来た。また織営を統率した恩賞丞相の鍾芳礼（広西人）が「兵役を免れることが出来る」と誘ったところ、職人以外に読書人や裕福な者が数千人（一時は 14,000 人近く）集まり、城外の清軍と連絡を取って内応を謀る者も現れた³⁵⁾。また巡査の周才大が設立した老民館、能人館は従軍に耐えられない老人、身体障害者や疾病のある者を収容し、屑拾い掃除などを行わせた。若く年齢を偽れない者は菜園豆腐館に入り、作った豆腐を献上することで兵役の忌避を図った³⁶⁾。

1853 年 12 月に南京を訪問したカトリック神父のクラブランは、「(南京は) 都市というよりも一つの兵営だった」³⁷⁾と述べている。城内には至るところに望楼と呼ばれる見張り櫓が設けられた。望楼には城内の警備を統轄した韋昌輝が配置した兵が見張るもの、それぞれの館が人を派遣するものがあり、高さは 10 メートルほどで、楼上には太鼓が置かれて時を告げた。また城壁と城外に築かれた土塁の間にも多くの望楼があり、清軍を発見すると銅鑼を鳴らして警報を城内に伝え、進攻してきた方向や城内から援軍を出す必要を五色の旗で合図した³⁸⁾。城門は内側に柵を設けるなど簡単に突破されない構造で、馬に乗った者や二人の者が並んで通れないように狭く改造された。また城壁の上に大砲 2 門と守備兵が置かれた。城外には幾重にも深い溝が設けられ、一面に鋭く削った竹籤が埋め込まれた³⁹⁾。城南の要所である雨花台、城東の鍾山や太平門、朝陽門の外には陣地が設けられ、多くの兵が置かれて

清軍の攻撃を阻んだ⁴⁰⁾。

クラブランは南京で人々が「兄弟」と呼び合い、共同生活をしていると指摘したうえで次のように述べている。

全ての住居は共有財産となり、衣食は公共の倉庫に貯蔵され、金銀や財宝は公共の金庫に納められている。人々は買うことも、売ることもできない。金は実のところ、個人の手元にあっても使うところがない。我々は広西人が現在着ている服を購入しようとしたが、不可能だった。それは首領たちによって彼らの部下たちに供給されるからである。そして南京への進攻後に人口が百万を突破したにもかかわらず、衣食の供給がこのように規則正しく行われていることは尊敬に値する。我々はそれが内戦（civil war）のただ中に、敵軍の包囲を受けながら行われているのをこの目で見た⁴¹⁾。

ここで彼が南京の人口を 100 万人以上と考えたのは正確ではない。太平天国の体験者である謝介鶴の書いた『金陵癸甲紀事略』は、1853 年夏の段階で男性が 10 万人、女性が 14 万人と述べている。その内訳は広西人が 4,000 人（男 1,500 人、女 2,500 人）、湖南人が 1 万 400 人（男 1 万人、女 400 人）、湖北人が 55,000 人（男 3 万人、女 25,000 人）、安徽の安慶や長江下流の揚州、鎮江などの出身者が 23,000 人（男 1 万人、女 13,000 人）、南京人が 15 万人（男 5 万人、女 10 万人）であった。53 年末になると出征する将兵が増え、逃亡者も増えたが、新たに加わる者たちもおり、男 10 万人、女 13 万人が南京で生活していたという⁴²⁾。

またクラブランが驚嘆したように、太平天国は清軍の包囲の中で城内の人々に物資を支給した。『賊情彙纂』によると、1853 年末の南京には 127 万石の粉、75 万石の米が貯蔵されていた。また聖庫には住民から没収した財産を含めて銀 263 万両、銭 335 万 5,000 串および首飾りなどの宝物があり、これを用いて長江上流域へ船を派遣して食糧を購入させた⁴³⁾。初めのうち食糧は必要に応じて支給されたが、やがて規定が設けられ、25 人ごとに毎週米 200 斤、銭 1,250 文、塩と油それぞれ 7 斤を支給された⁴⁴⁾。また労働の強度に応じて支給される米の量は異なり、牌面は 1 日 1.5 斤から 1 斤（1 斤は 600 グラム弱）、牌尾は 0.5 斤、女性の場合は地位に応じて 1 斤から 0.6 斤が配給された⁴⁵⁾。

この聖庫の備蓄について、南京城内の読書人で清軍との内応工作を試みた張継庚は「偽聖庫の中は、初め城を破ったときに一千八百万余両を運び込んで貯蔵したが、現在は八百万両が残っている」⁴⁶⁾とあるように、当初集めた備蓄が僅かな期間で減少したと指摘している。同じことは『賊情彙纂』も述べており、1854 年 4 月の備蓄は米 10 数万石、銀 30 万両であったという⁴⁷⁾。短期間で備蓄が減少した理由について、『賊情彙纂』は南京の人口を支えるための支出の多さを挙げている。また張継庚は太平天国が秘かに北京で官職を購入したり、清軍に投じて諜報活動をしていると述べ、「多くの銀を用いて京報を買って読んでいるため、城外の情勢は手に取るようにわかっている」⁴⁸⁾と指摘した。これが事実なら、南京到達

後の太平天国は情報戦に多くの費用を投じていたことになる。

なお備蓄が減少すれば、食糧の支給も目減りせざるを得なかった。張汝南は「十日ごとに典聖糧に赴いて米を受け取ったが、一人あたり一斤とは言っても、一斤は七合に過ぎなかった。米が不足すると稲を支給することになり、やはり一斤だったが、精米すると僅か四合であった。やがて稲も不足すると、半斤を与えるようになり、最後は四両になった」⁴⁹⁾と述べている。聖庫制度に基づく物資の支給は当初から脆弱なものであったと言うべきだろう。

次にクラブランは「人々は買うことも、売ることも出来ない」と述べたが、これは半分正しく、半分誤っていた。南京占領直後の太平天国は「およそ物は天父が賜ったもので、金で買う必要はない」と主張し、城内の店舗は品物を没収されて営業できなかった。やがて物資が不足すると、人々に城外へ出て近郊の農民や商人が持ちよる商品を購入することを認めた。隙を見て脱走する者が相次いだ。そこで北門橋に「天朝某店」と名付けた店舗群（五大行と呼ばれた）を開き、古参兵が城外で購入した物資をここで各館に販売した。

これらの店舗は雑貨や米、油、肉、海産物、絹や布などを扱ったが、まず聖庫の物資を販売する許可が必要で、利潤をあげることに制約があった⁵⁰⁾。購入する側も「館」を単位に費用を申請する必要がある、ある軍帥が部下 170 名のおかず代が足りないため、聖庫から 1 人あたり銭 80 文を支出してほしいと上官に求めた記録が残っている⁵¹⁾。またある太平軍兵士の話によると、少なくとも館の中では将校、兵士の区別なく同じ食事をしていた⁵²⁾。つまり南京の商業活動は不足しがちな物資の支給を補完する目的で行われた。人々は手に入れた物資をさらに転売し、僅かな利鞘を稼いで生活の足しにしたという⁵³⁾。

(c) 宗教儀礼と習俗の改変

太平天国統治下の社会を最もよく特徴づけたのは礼拝などの宗教儀礼だった。1853 年に太平軍が占領した鎮江を訪問した宣教師チャールズ・テイラーは、宿営地で『天条書』に収められた「上帝は天の聖なる父であることを讃えん。イエスは救世の聖主であることを讃えん。聖神風は聖霊であることを讃えん。三位は一体となって真の神たることを讃えん」という賛歌を耳にし、それがバプテスト派の頌栄の賛歌と似ていることに心を動かされたと述べている⁵⁴⁾。

この賛歌は太平天国を通じて礼拝や朝晩の祈祷で唱えられた⁵⁵⁾。毎週土曜日に行われた礼拝は前日から合図の旗が掲げられ、夜明け前から起きて出席することが義務づけられた。洗礼式や食事の前にささげる感謝の祈りも『天条書』の内容をもとに暗誦された⁵⁶⁾。また礼拝銭が支給され、人々はそれをを用いて館ごとに感謝の供え物を献げた⁵⁷⁾。太平天国が刊行した曆書は週に 1 回「礼拝」を行う日を明記しており、ヨーロッパの一週間、安息日といった概念を人々に伝えた⁵⁸⁾。また礼拝は戦いの前にも行われた。太平軍の将兵は跪いて「天父の顧みがありますように！」と祈り、清軍は何か秘術があるのではと恐れた⁵⁹⁾。

太平天国の賛歌は時に変更が加えられた。1853 年に秦日綱らが作った賛歌は、3 行目の

聖霊に関する部分が「東王は聖神風であることを讃えん」となり、以下三位一体には触れることなく、蕭朝貴以下の諸王を「雨師」「雲師」「雷師」「電師」といった称号で讃える内容に変わった⁶⁰。翌年南京を訪問してこの新しい賛歌を見た宣教師カルバートソンは、楊秀清を「聖神風」としたのは「神に対する冒瀆」であり、「他の王たちも皆、仰々しいタイトルで自分たちの威厳を増すことが必要だと考えている」⁶¹と批判的に評価している。1860年以後、賛歌には再び細かな変更が加えられた。また賛歌の一節は夜間の見張りの合い言葉としても用いられた⁶²。

礼拝と並んで太平天国が熱心に行った行事に講道理があった。講道理は新規参加者に上帝教の教義や太平天国の使命、軍の規則を伝えた宣伝、教化活動で、城外の広場に高い演壇が準備され、全ての住民に参加が義務づけられた。清朝時代には文字の読めない下層民を対象に「宣講」と呼ばれる教化活動があったが、太平天国のそれは宗教性および政治性が突出していた⁶³。太平天国には専門の聖職者がいなかったため、壇上に登ったのは「官長」⁶⁴即ち多くが広西出身の老兄弟で、彼らが語ったのは次のような内容だった。

我々は金田で起義してから、どうして容易にここに来たなどと言えようか。酷暑や厳寒に耐え、険しい山や川を抜け、あらゆる苦勞をなめて国の基を築いたのだ。なんじらは太平の日に生まれ、足を挙げれば天国への階段を昇ることができる。夫が死んでもおのずから夫はおり、妻が死んでも妻はいる。怨み憎しみもなければ、悲しみも声を上げて泣くこともない。妖魔が一掃されれば天の福を受け、おのずから天父天兄の導きがあるのだ⁶⁵。

ここからは彼らの告白する信仰が、蜂起以来の様々な困難とそれを克服した勝利への確信に支えられていたことがわかる。とくに永安州脱出戦での勝利は「上帝が与えた庇護のお蔭」⁶⁶であり、清朝の打倒という太平天国の使命の正しさを証明する一種の奇跡であると強調された。しかし「聞く者はすでに疲れたが、話は終わらなかった。男子が退出を命じられると今度は女子の番となった」⁶⁷とあるように、彼らの話は長く一方的だったために人々の共感は得られなかった。また他の講道理では「天父天兄は人々を救い、各偽王を生み出されてお前たちを教え導いたのだ」、「天王は天父の第二の愛する子であり、なんじら世の人を救った。なんじらは皆、恩に報いなければならない。どうやって恩に報いるのか？戦って妖魔を殺すこと、これが第一の恩に報いる行いだ！」⁶⁸と説くなど、太平天国の政治的主張がくりかえし強調された。食事の前の感謝の祈りも、最後に叫ぶ言葉は「妖魔を殺し尽くせ！」⁶⁹だったという。

次に上帝会が急進化するきっかけになった偶像破壊は、南京でも「神廟を妖廟と呼び、神仏を壊して水や厠に捨てた」⁷⁰と引き続き行われた。南京は名利も多かったが、多くの寺院や廟の建物が取り壊され、その木材は宮殿の造営や陣地構築に用いられた⁷¹。太平軍が占領

した鎮江でも寺院は破壊され、僧侶たちは髪を伸ばす（還俗する）ように求められた⁷²⁾。

初めのうち太平天国は儒教を排撃し、儒教経典や書籍を焼き捨てることが行われた⁷³⁾。だが「初めは四書五経を妖書とみなしたが、後に刪改を経て見ることを認めた」とあるように1854年に対儒教政策を転換し、「鬼神喪祭」に関する部分を削除したうえで閲覧を認めた⁷⁴⁾。中国社会で重んじられてきた祖先祭祀は「妖」として禁止され、人が死ぬことは「昇天」つまり喜ぶべきこととされた⁷⁵⁾。遺体の埋葬は聖書の記載に基づいて布にくるむことが義務づけられ、棺桶や喪服を用いたり、「南無」を唱えることは許されなかった⁷⁶⁾。墓碑も死者の名前と年月を刻むだけの簡単なものになった⁷⁷⁾。

太平天国の人々を最もよく特徴づけたのは長髪姿であった。リンドレーの著書によって広く知られているこの髪型は、清朝統治下で行われた辮髪を拒否した点で太平天国側の人間であることを示す明確な指標となった⁷⁸⁾。この時期の清朝側の記録には次のように報告されている。

旧賊は多くが広西、広東人で、長髪は辮のようであるが、数千人に過ぎない。後から参加した賊は湖南人が最も多く、髪の長さは一尺余り、これに続くのが湖北人で、髪の長さは四、五寸である。その他の新たに加わった賊は、江西、安徽、江南の人で、髪は僅か一、二寸である⁷⁹⁾。

ここからは伸ばした髪の長さによって蜂起以来の老兄弟であるか、最近参加したばかりの新兄弟であるかが一目瞭然だったことがわかる。このため清軍は捕らえた太平軍兵士を髪の長さで殺すか、脅されて従った者として放免するかを決めた。また長髪の太平軍將兵を殺すことは手柄となったため、南京を包囲した清軍將兵には髪の長い女性の首を斬り、これを上官に差し出す者がいた⁸⁰⁾。城外に出ることは団練に捕らえられる危険もあったため、清軍の支配地域へ出かける密偵や商人は剃髪姿にすることが許された。

髪型は服装とも密接に関連しており、太平天国は男性が清朝スタイルの帽子をかぶること、女性が裙子（スカート）を履くことを禁止した⁸¹⁾。將校たちは身分に応じて黄色か紅色の袍（長衣）や馬褂（長衣の上に着るジャケット）、風帽に身を包んだ⁸²⁾。

太平天国はアヘンの吸飲を厳しく禁じた。アヘンに対する厳しい姿勢は上帝会以来のもので、南京到達後に洪秀全は「人に勧めて鴉片煙を戒める詔」⁸³⁾を發布した。当時アヘンには舶来品の「洋煙」、国産品の「黄煙」があったが、前者は吸飲した者を「斬首して留めず」、後者については「初犯は打ち据えること一百、枷すること一礼拝（つまり1週間）、再犯は打つこと一千、枷すること三礼拝。三犯は斬首して留めず」⁸⁴⁾という禁令を設けた。長江上流へ出征した国宗の韋志俊（韋昌輝の弟）らもアヘン吸飲の弊害について解説し、販売する者、吸飲する者を共に処刑すると布告している⁸⁵⁾。

1853年にヘルムス号艦長として南京を訪問したフィッシュボーンは、「彼ら（太平天国）

は杖で二十回打つと言ったら、決して十九回で手を弛めたりしない」⁸⁶⁾というある中国人の言葉を引用しており、違反者に対する処罰は厳密に実行された。ただし例外もあり、1855年に下凡した天父は「洋煙」を吸った林来発について、「他人に誘惑されたのであり、本心ではない。まさにその死罪を赦すべきである」⁸⁷⁾と述べ、奴隷身分にしたうえで投獄するように命じた。

これと並んでタバコや酒、賭博も禁止された。特に軍中で「集まって飲酒し、秘かに軍事を議する者」は、発覚すれば全員が死罪となった⁸⁸⁾。だが1854年に楊秀清が「聞くところでは朝廷内や軍中で酒を飲んで騒ぎを起こす者が少なくないという。これらの行為は実に痛恨である」⁸⁹⁾と述べたように、完全に禁絶することは出来なかった。

さらに太平天国が厳しく禁じたものに「娼妓」即ち売春があった。これを禁止した韋志俊らの布告は、「一夫一婦は理の当然」と述べたうえで、「娼となった者は家中を剽洗」⁹⁰⁾とあるように被害者である女性とその家族に対して厳しい処罰を行うように命じている。アヘン吸引から娼妓に至る禁止された(筈の)諸慣行はなくならなかった。

このほか太平天国は廟信仰や祖先祭祀と関連の深い地方劇について、「およそ邪歌や邪戯は一概に停止し、もし人を集めて演戯をする者がいれば、全て斬首する」⁹¹⁾と禁止した。その後演劇の道具が手に入ると、楊秀清は南京で演劇を行わせたが、眼の病気が再発すると中止となった⁹²⁾。また老人館が開いた茶肆(茶館)が憩いを求める人々で賑わったが、これもやがて禁止されたという⁹³⁾。

このように太平天国の南京統治はその宗教性ゆえに厳しい統制を伴うものであったが、そこでめざされた目標とは何だったのだろうか。1854年5月に楊秀清は南京「城廂内外の兄弟姉妹」に対して次のような布告を出している。

さて本軍師は謹んで天命を受け、真主を補佐してこの世を掃き清め、昨年春に百万の雄師を率いて真っ直ぐに建業(南京のこと)を攻めた。城を破った日、本軍師は厳しく号令して兵士を統率し、ただ妖魔の官兵を誅戮することだけを認め、良民は一人たりとも妄りに殺すことを許さなかった。

この時兵士たちが天の命令を守ったため、なんじら城廂内外の兄弟姉妹で生命を保全できた者は数十万を下らない。これは本軍師が上には天父の殺生を好まぬ心、我が主の海のように深い度量を仰ぎ、この仁義の師を行って邪を斬り、正しきを留めた結果である。

その後天の意志を仰ぎ承り、男と女の集団を分けて淫乱の弊害が広がるのを防いだ。だがそれは暫くの間分離したに過ぎず、将来罪隸(直隸のこと)を誅戮すれば、元どおり一家が団らんすることが出来る。なんじら民人は自分の財産を全て失い、自分の肉親や妻子と引き離されて、怨嗟の声は今も止まない。だがなんじらは昔から王朝が交替する時、拳兵して罪を問う者は城を破るや全てを斬殺し、玉石共に焚いて血は流れて河と

なり、ニワトリ、犬一匹たりとも残さなかったことを知らない。わが天朝のように一人たりとも妄りに殺さず、なお衣食を与えて一視同仁の扱いをした例があっただろうか。もしなんじらが信じないなら、史書を読んだことのある者、あるいは白髪の父老に聞いてみるがいい。彼らはおのずから知識があり、なんじらも納得することだろう。

いまなんじらがこのことをいまだ理解していないことを恐れ、ここに特に諧論を行う。なんじらは生きとし生けるものを哀れむ天父天兄の恩をひたすら認識することで、初めて生命を保つことが出来ることを知らねばならない。生命はすでに保たれたのだから、おのずから福を享ける時が来る。つまりいにしえの大乱の歴史を知ることで、初めてわが天朝の仁義の厚さと無辜の者を殺傷しないことを知るのである⁹⁴⁾。

ここでは中国の王朝交代が多くの殺戮を伴った歴史と比較しながら、太平天国が南京の住民を「保護」したことを根拠として新王朝の正統性を主張している。楊秀清は南京の人々が不満を持っていることを認めながらも、それは清朝が打倒されるまでの一時的な苦勞に過ぎず、軍事的勝利が達成されれば従来通りの生活を取り戻すことができると説いた。むしろ上帝への信仰を積極的に受け容れることで、新王朝の民として共に幸福を享受せよと主張している。

だがここで語られた内容は、南京までの過程で太平天国が提起した「上帝信仰の回復によるいにしえの中国の復活」「上帝のもとでの一大家族の実現」といった理想に比べて、迫力を欠いていたと言わざるを得ない。辺境の見捨てられた民の異議申し立てだった太平天国の社会運動としての情熱は、この文章では明らかに後退していた。そして楊秀清も認めざるを得なかった人々の不満は、公有制の矛盾と相まって強まりこそすれ、解消されることはなかったのである。

2、江南大營の成立と張継庚の内応事件

(a) 江南大營の成立と初期の戦闘

太平軍が南京を占領した当時、欽差大臣の向榮は長江を下流へ向かっていた。3月25日に安徽省の蕪湖に到着した彼は、配下の兵を陸路南京へ向かわせた⁹⁵⁾。29日に彼の軍は南京西南の板橋鎮に到達したが、太平軍は城壁の外に落とし穴や土城（土壘）を設けるなど防備を固めていた。西面からの攻撃が難しいと見た向榮は、城東にある明代の王墓である孝陵一帯へ軍を進め、ここに陣地を築いて太平軍の蘇州、常州方面への進出を阻もうとした。

難民から南京が占領された時の状況を聞いた向榮は、救援が間に合わなかったのは「実に国と民に背く」罪であるとして処罰を求めた⁹⁶⁾。だが九江で向榮に同行した内閣学士の許乃釗（浙江錢塘人）は、向榮が六十過ぎの高齢ながら將兵を叱咤激励して行軍させており、太平軍が彼を恐れていることを理由に留任を求めた。また彼は敵前で司令官を代えることは「兵家の忌むところ」であり、南京が陥落した原因は指揮の不統一による「満漢兵勇の不

和」にあったと指摘した⁹⁷⁾。これを受けた清朝は人材不足や安慶救援を命じられた欽差大臣の琦善も城の陥落に間に合わなかったことを理由に、向荣に引き続き指揮を執るように命じた⁹⁸⁾。

向荣は城から 10 キロ程東の沙子岡へ迂回し、4 月 4 日に城の東南にある土城を攻めてこれを占領した。翌 5 日に清軍が孝陵に近づいたところ、鍾山（紫金山）の太平軍が攻撃をかけた。だが清軍はこれを撃退して陣地を築いた。7 日に清軍は鍾山の太平軍陣地を攻めたが、太平軍が反撃して双方に死傷者が出た⁹⁹⁾。

この時向荣のもとには四川、湖南兵を中心に貴州、広東、広西兵など 12,700 名の緑営兵がおり、元天地会首領で都司に昇進していた張国樑、同じく天地会の元首領で広東信宜県の凌十八が率いる上帝会を弾圧した馮子材、広西武宣県の団練指導者だった劉季三らが率いる壮勇 5,100 名を加えると、合計 17,800 名の兵力がいた¹⁰⁰⁾。また向荣の留任を求めた許乃釗が幫辦軍務、署江蘇巡撫として補佐を命じられ¹⁰¹⁾、江西で団練の結成に功績をあげた元塩運使の彭玉雯が総糧台として補給の責任を負った¹⁰²⁾。これ以後孝陵一帯に展開した清軍陣地は江南大営と呼ばれ、南京の太平天国に軍事的な圧力を加えることになった。

それでは江南大営の成立は太平天国にとってどの程度の影響があったのだろうか。城南にある通済門外の太平軍陣地が兵力不足と見た向荣は、4 月 14 日に四川提督蘇布通阿らに鍾山と中和橋を攻めさせ、城外の太平軍を分断しようと試みた。また別の一隊に通済門を襲わせた。清軍が鍾山の太平軍陣地 3ヶ所を破ると、城内から救援の部隊が出撃したが、清軍に撃退された¹⁰³⁾。

4 月 19 日に清軍は城外東南の七橋甕を攻撃し、鍾山と城南の最重要拠点である雨花台との間の連携を遮断した¹⁰⁴⁾。翌 20 日に清軍が再び攻勢をかけると、鍾山の太平軍守備隊は「竜脖子（天堡城と地堡城）」以外の陣地を焼き払って朝陽、正陽、通済門外へ退いた¹⁰⁵⁾。だが清軍が占領した場所は城上からの砲撃を避けられなかったため、向荣は城東 1 キロ程の山麓に陣地を置いた¹⁰⁶⁾。そこは「全城を俯瞰」することが可能で、向荣は 18ヶ所の陣地を構築した¹⁰⁷⁾。こうして「まず鍾山を奪い、もって形勝に拠る」¹⁰⁸⁾という向荣の戦略は形を整えた。

江南大営の清軍は南京各城門への攻撃をくり返した。5 月 7 日に蘇布通阿、総兵馬竜、秦定三らは城の西南にある中和橋を攻め、14 日にも朝陽門、通済門を攻めて城外の太平軍陣地を破壊した¹⁰⁹⁾。5 月 24 日に再び清軍が朝陽門を攻めると、旗人駐屯地だった内城に東王府を構えていた東王楊秀清は驚いて大砲で応戦させ、誤って太平軍の牌刀手数数百名が死亡した¹¹⁰⁾。さらに向荣は城の北側にある太平門、神策門への攻撃を試み、6 月 16 日に「改装易服」させた兵士 4,000 名に太平門外の太平軍陣地を襲わせた¹¹¹⁾。

これらの攻撃は太平天国にとって一定の脅威とはなったものの、それは直ちに南京城の奪回にはつながらなかった。元々向荣の軍は太平軍の追撃中に徴用した僅かな船を除いて水軍がなく、作戦活動は陸上に限定されていた¹¹²⁾。長江沿岸にあたる城の西北部への攻撃も行

われず、8月によく雨花台と聚宝門（南門）、西南にある早西門への攻撃が試みられた。

だが雨花台へ向かった蘇布通阿らの軍は密林の中で一度道を見失い、到着後は深い濠や一面に張り巡らされた竹籬、障害物と太平軍の抵抗に苦しんだ。また早西門へ向かった元江南提督鄧紹良の軍は雨花台の南を大きく迂回したために到着が遅れ、太平軍の守備隊に発見されて攻撃は失敗した¹¹³⁾。8月26日、9月14日にも城南の雨花台、聚宝門、城東の朝陽門などに対する攻撃が行われたが、いずれも成果をあげることは出来なかった¹¹⁴⁾。

(b) 戦線の拡大と兵力の分散

江南大営の成立当初、咸豊帝は「向榮は金陵に到達後、しばしば逆匪を剿捕し、計画を実行して勝利を収めるなど、悉く機宜にかなっている」¹¹⁵⁾と賞賛した。だが次第に「向榮、許乃釗の報告には僅かな勝利があるものの、決して省城に攻め入った訳ではなく、深い焦りを覚える」「先の命令に従って迅速に進攻し、これ以上観望してはならない」¹¹⁶⁾と厳しい口調が目立つようになった。さらに雨花台への攻撃が失敗したとの報告を受けた咸豊帝は、「これらの戦いは僅かに大敗に勉めているだけ」であり、向榮は「故意に引き延ばしを図っている」のではないかと叱責した¹¹⁷⁾。

実際のところ、江南大営の清軍は長江南岸の各地に兵力を割かなければならず、南京城の包囲を完成することが出来ないばかりか、攻撃に専念することも難しかった。1853年3月末に太平天国が長江下流の鎮江、揚州へ軍を送ると、清朝は「向榮は江南に駐兵しており、あらゆる南岸の堵剿事宜はその専責」であるとして鎮江の救援を命じた¹¹⁸⁾。これを受けた向榮は4月にまず鄧紹良と兵3,000余名を鎮江へ向かわせ¹¹⁹⁾、5月には増援部隊も併せて鎮江救援軍は8,000名に増えた¹²⁰⁾。また太平天国が北伐と西征を開始すると、6月末以後に向榮は兵力を割いて山東、河南一帯や江南大営の糧台が置かれていた江西南昌へ送った¹²¹⁾。さらに7月に鄧紹良が鎮江で敗北すると、広西以来長く向榮のもとで戦った旗人の総兵和春が署江南提督となり、兵2,300名を率いて救援に向かった¹²²⁾。

この年8月に報告された江南大営の兵力は、蘇布通阿、馬竜の四川兵、秦定三の貴州兵、鎮江での敗北後に南京へ戻った鄧紹良の湖南、陝西兵を含めて14,800名とされている¹²³⁾。だが将兵の中には長い従軍生活で負傷あるいは病気となる者が多く、1850年に広西へ派遣された湖南、貴州兵4,000名のうち3,000名以上が原隊に戻った。向榮は原隊のある各省から新兵を補充すべきだが、遠隔地ゆえに間に合わない。また戦場近くで壮勇を招いても、費用がかかるだけで戦力にならないため、部隊に随行している人員の中から使えそうな者を集めて数を合わせたと述べている¹²⁴⁾。

その後も1853年9月に上海で小刀会が蜂起すると、署江蘇巡撫の許乃釗が総兵虎嵩林の兵1,000名と共に南京を離れた¹²⁵⁾。加えて長江から蘇州、常州方面への門戸にあたる安徽蕪湖県の東壩に置いた守備兵が少ないと見た向榮は、11月に鄧紹良、総兵徳安の率いる兵勇2,200名を派遣した¹²⁶⁾。

この間、琦善の率いる江北大営の清軍が揚州を奪回出来ないことに苛立った咸豊帝は、11月に向榮に対して和春あるいは蘇布通阿の軍を長江北岸へ派遣するように命じた¹²⁷。これに対して向榮は、和春を初め多くの指揮官がすでに外地へ出ているうえ、長く四川兵を統率してきた馬竜が病死したため、「兵は分ける程に少なく、将は派遣する程に少なくなり、もし緩急があれば頼りになる者は実に多くない」と述べて蘇布通阿を派遣することに難色を示した¹²⁸。

また12月26日に揚州の太平軍が撤退して清軍が揚州城を奪回すると、向榮は先に長江北岸に派遣していた総兵瞿騰竜の陝西兵を呼び戻し、水軍の欠如によって不足している機動力を補うために江北大営の馬隊1,000名を南岸へ派遣するように求めた。だがこの要請に対して咸豊帝は「無恥堪えざるの至り」との硃批を書き付けたうえで、「汝は広西から賊を追って江南まで至り、いたずらに多くの兵を費やして、いまだ寸尺の功を見ない。なお何の面目があつて江北の兵を派遣せよと言うのか？断じて許さぬ！もし江北の兵が必要なら、まず汝の首を送って来い」¹²⁹と激しい叱責を加えた。

この時北伐軍は独流鎮、静海県に籠城して北京に圧力を加えており、咸豊帝は余裕を失っていた。その後1854年4月に向榮は清朝の命に従い、北伐援軍の北上を防ぐために秦定三に貴州兵1,000名を率いて徐州へ向かわせた¹³⁰。清朝にとってまず重要なのは長江北岸の防衛と太平軍の北上阻止だったのであり、南京の攻略を最優先事項とは見なしていなかったことがわかる。

(c) 補給体制の確立と江南大営の「軍都」化

ところで先の咸豊帝の硃批に見られるように、清朝は長く太平天国を追撃してきた向榮の軍が真剣に戦っていないという認識を持っていた。確かに江南大営の清軍は激しい略奪や暴行で知られた潮州勇など資質の悪い部隊を排除しきれないでいた¹³¹。指揮官や将校の中にも、長く陣中であつて度々告発や処分を受けた元総兵李瑞¹³²、兵力不足を理由に湖南南部の道州を退去して太平軍を勢いづけた元湖南提督の余万清¹³³、長沙から北上した太平軍の追撃を怠った元広西提督で旗人の福興¹³⁴など「罪を戴いたまま留任」した人物がいた。

これらは江南大営の陣容がそれまで太平軍と戦いを交えた顔ぶれと変化がなく、組織として旧態依然であつたことを物語っている。ただし将兵の戦意の低さや略奪行為は、糧台が後方に取り残されて補給が続かず、給与の欠配が続いたことも原因の一つだった。

1853年2月に向榮は広西糧台を撤回し、江西南昌に糧台総局を置いて兵勇の給与、食糧を支出するように求めた¹³⁵。清朝が江西巡撫張芾に銀10万両を向榮の陣営へ輸送するように命じると¹³⁶、張芾はアヘン戦争の例に倣って章程を作成し¹³⁷、銀44万両、米1万石を南京へ送って急ぎの需要に応えた¹³⁸。彭玉雯が総糧台として南京に到着すると、補給は比較的順調に行われるようになり、7月までに戸部が支出を認めた銀238万両、糧米4万石のうち、銀140万両が主として江西経由で江南大営に届けられた¹³⁹。

江南大営は兵糧として毎月銀 20 万両を必要としたが、1853 年秋に各省から送られる予定の餉銀が滞り始めた。向榮は彭玉雯を蘇州、杭州へ派遣して交渉に当たらせ、浙江から毎月銀 6 万両、江西から銀 4 万両を支出するとの回答を得た。また広東の粵海関から銀 10 万両を支出するように求めた¹⁴⁰⁾。だが 1854 年に西征軍が湖北、湖南へ進出すると、江西が負担していた餉銀は湖南へ転送されることになった。また広東で天地会反乱が発生すると、輸送途中だった銀 5 万両も「截留」されて南京に届かなかった¹⁴¹⁾。

江蘇省の税収は多くが徐州の糧台に送られ、江北各軍の軍餉に充てられた。また 1853 年 9 月までの 7 ヶ月間で銀 22 万両が江南大営へ送られ、鎮江へ派遣された江蘇兵の軍餉も支えた¹⁴²⁾。8 月に清朝は两江総督怡良の求めに応じ、上海の関税収入を専ら南京、鎮江の軍餉に用いることを認めた¹⁴³⁾。だが小刀会が上海で蜂起すると、租界のヨーロッパ人は上海道による関税徴収を 54 年 7 月まで禁止した¹⁴⁴⁾。1854 年に入ると蘇州に糧台総局が置かれたが¹⁴⁵⁾、各地からの軍餉は滞ったままだった。向榮は「昨年三省から毎月銀二十万両を送られることになったが、ついで江西、広東からは軍餉の輸送がなく、ただ浙江から毎月送られる銀六万両、上海・江蘇の二カ所から毎月送られる銀四、五万両など、毎月十五、六万両に止まっている」と述べたうえで、兵士の給与に 2 ヶ月あるいは 3 ヶ月の欠配が出ていると報じている¹⁴⁶⁾。

いっぽう 1853 年に幫辦軍務の雷以誠らが江北で厘金の徴収を始めると、江南でも各地で捐局が設けられ、徴収された厘金を財源として鎮江の兵餉を支えた¹⁴⁷⁾。1855 年に上海の小刀会反乱が鎮圧されると、江蘇の財政状況は好転した。上海税関だけでなく、滬甯関の税収からも江南大営に銀 1 万両程度が送られた¹⁴⁸⁾。また上海から撤退した江蘇巡撫吉爾杭阿の部隊 9,000 名には引き続き江蘇から毎月銀 9 万両が支給された¹⁴⁹⁾。1855 年 3 月の向榮の上奏は、広東からの軍餉はいまだ届かないものの、浙江からは毎月 6 万両、江蘇からは前後合わせて 6 万両、江西からも 2 ヶ月分 8 万両が送られたと述べており、江南大営の軍餉も次第に安定するようになった¹⁵⁰⁾。

このように江南大営は一時期給与の欠配に苦しんだものの、中国で最も豊かな浙江、江蘇を財源としたことで兵糧に余裕が生まれた。竜盛運氏は江南大営の兵士の給与が毎月銀、米を合わせて 5 両から 8 両以上と高く、他地区の清軍兵士だけでなく、毎月 4 両 2 錢だった湘軍兵士と比べても高かったと指摘している¹⁵¹⁾。また向榮は江南大営の壮勇 5,100 名について、正規兵の例に倣って毎日米 8 合余りを支給した。その理由として向榮は、壮勇が給与として与えられた銀で米を購入しようとして地元民との間に争いが発生することを防ぐためと述べている¹⁵²⁾。言い換えると江南大営における兵士の給与の高さは、清軍が行く先々で略奪をくり返し、これに憤激した人々が太平天国に呼応するといった現象をくり返さないための措置であった。

むろんこうした優遇策は新たな「腐敗」を生みだす温床ともなった。進士出身で各地の地方官を歴任した翼長の張集馨（江蘇儀征県人）は、1856 年のこととして次のように述べて

いる。

孝陵衛の街市は兵勇が集まる場所であり、また売買街であって、殆ど手に入らない物はなかった。兵勇たちは地元の住民と婚姻を結び、子供をもうけて、それぞれ家室の念を抱いていた。家を持たない者は地元の娼婦を宿営地に入れて代わる代わることをしたが、後に妬みから争いを起こした。向榮はこれを知ると、立ちどころに数人を斬り、また雇われた娼婦を宿営地の外にさらし首にした。だが彼女たちは恬として法を恐れず、昼は田んぼで耕作をするふりをして、夜になると街に入り宿営地へ潜り込んで、奸宿することこれまで通りだった。

賊には固い志があるが、兵には戦う気力が無い。金陵を奪回するのは、恐らくすぐという訳にはいかないだろう¹⁵³⁾。

ここでは兵士の高収入に当てこんだ市場が賑わっただけでなく、彼らと南京住民との婚姻が進み、人口も増えて一種の「軍都」が形成されたことが窺われる。結婚できない者も娼婦を抱え、見せしめの処罰をしても効果がなかった。だが清代の制度では宿営地の付近に家族が住み、兵士の親族が長夫などの補助要員として軍中生活を送ることが珍しくなかった。とくに江南大營では広西など遠隔地出身の壮勇で、一族や同郷人を招き寄せる傾向が強かったという。

1855年に南京城内では男女を別々に組織する社会制度への不満が高まり、東王楊秀清の命令によって将兵の婚姻と家族の同居が認められた¹⁵⁴⁾。江南大營の清軍将兵も数年にわたる軍中生活を余儀なくされた点では同じで、両者共に戦場の緊張感に耐えることには限界があったのである。

また張集馨によれば、江北大營の副都統だった徳興阿は無能で、「賊を恐れること虎の如し」であった。また雷以誠は厘金を徴収して私利を貪り、その子弟や胥吏、部下たちも「擾害」「荼毒」が絶えなかったという。鍾山の麓に設けられた向榮の陣地は「帳房破爛」¹⁵⁵⁾と甚だ質素であったが、足を患っていた彼は自ら出陣することは少なく、将兵を厳しく統率することも難しかった。広西、湖南で清軍の陣営にいた広西按察使の姚瑩は、向榮について「兵を用いるに規律はさほど厳密ではないが、重賞を惜しまなかった。このためまた人の力を得ることが出来た」¹⁵⁶⁾と評価している。限られた兵力と咸豊帝の性急な命令の中で、南京の奪回という実現困難な課題を背負った向榮にとって、兵士を優遇し士気を高めることで現状維持を図ることは数少ない可能な方策だったと言えよう。

(d) 張継庚、呉復成らの内応未遂事件

このような制約を抱えた江南大營の清軍は、城外へ出撃する太平軍を牽制し、城内の清朝支持者と連絡を取って内応工作を行うことに力を注いだ。

まず手がけたのは団練の結成と活用で、許乃釗は溧水、高淳県の団練、練勇に「(清軍の) 声勢を助け」、「土匪を捕らえ」させた。また「金陵近城各郷も一律に団練を行わせ、長髪の実賊で買物や斥候に出る者がいれば、郷民がたちどころに格殺して、僅かでも逸出させなかった」¹⁵⁷⁾とあるように、城内の太平軍将兵が城外へ出て活動することを妨害させた。

次に向荣は太平天国が城北の神策門外で近郊の商人を集め、夜明け前に市を開き食物を購入しているとの情報を入手した。そこで9月19日夜に住民を装い、ニワトリや鴨、野菜などを担いだ兵勇を商人の隊列に紛れ込ませた。彼らが城門の太平軍陣地に近づいたところで、蘇布通阿の軍が突撃する手筈だったが、城から2キロ程の地点で商人と清軍将兵がはち合わせし、騒ぎを聞きつけた太平軍将兵が城内に通報した。清軍は内濠まで攻め入ったが、城内からの発砲によって多くの兵が死傷し、攻撃は失敗した¹⁵⁸⁾。

1853年秋に清軍陣地では「瘧痢(マラリア)」が流行し、多くの将兵が感染した。また小刀会が蜂起した上海に援軍が派遣されて兵力が減少すると、太平軍が江南大営を攻撃すると噂が流れた。向荣は数千名の兵を選び、太平軍が出撃した隙について城内へ突入させようとしたが、太平軍は「固守をもって能とし、あえて軽々しく出て冒険せず」と攻勢をかけてこなかった。

また長江では太平軍の軍船が南京と鎮江、揚州との間を頻繁に往来していたが、水軍のない江南大営はこれを止めることが出来なかった。向荣は上海、広東、鎮江の軍船を南京へ派遣するようくり返し要請したが、水軍は様々な理由をつけて姿を見せなかった。そこで10月に向荣は数十隻の小舟と水勇300名を雇い、通りかかった太平軍の輸送船を襲わせたが、「船が小さく勇が少なかった」¹⁵⁹⁾のために太平軍の大型船に敗退した。

この頃向荣は江南大営の兵力が12,000名(兵9,000名、壯勇は3,000名)を超えず、そのうち病気、負傷の者が2、3割にのぼると述べている¹⁶⁰⁾。城を包囲する兵力が確保できない中で、清朝側は軍功李桂芬、拳人劉大鏞らが江寧48社で組織した団練に早西門へつながる城の西南を、職員李寅、生員許長松らが上元140村で組織した団練に神策門へつながる城の東北をそれぞれ守らせた。また団練兵士の中から4,000名を選抜し、清軍の攻撃に協力させることにした。さらに向荣は劉大鏞らに地元の小民船を雇わせ、太平軍内の「脅され従っている船」に働きかけて、清軍が南京城を攻撃した時に船を焼くか北岸へ撤収させて、城内の太平軍将兵の逃げ道を断つことなどを申し合わせた。

向荣はこの上奏で「私は先に城内で解散の計略をめぐらし、秘かに内応を通じたところ、陸続として逃げ出す者は数万にのぼり、検点、指揮などの各偽職で蕭誠の如き者が投降して陣営に至った。また城内からの秘かな報告によれば、すでに約三千人余りが時を待って内外から夾撃することになっている」¹⁶¹⁾と述べている。こうした内応工作は永安州でも行われたが、南京で有名なのは張継庚、呉復成らの活動であった。

張継庚は南京の廩生で、父親は湖南の知県を歴任した。張継庚も湖広を「客遊」していたが、1852年に湖南布政使潘鐸のもとで長沙攻防戦に参加した。太平軍の撤退後、必ず南京

を攻撃するに違いないと考えた張継庚は、南京へ戻って西城保衛分局に入り、ついで江蘇布政使祁宿藻の命を受けて保衛、籌防二総局で防衛の準備を進めた。1853年3月に太平天国の南京攻撃が始まると、張継庚は郷勇1,000名を率いて戦いに参加し、長沙での経験を踏まえた献策を行ったが、両江総督陸建瀛には採用されなかった¹⁶²⁾。

南京が陥落すると、張継庚のいとこや多くの友人が戦死した。彼自身は城北の山中に隠れたところを捕らえられ、北王韋昌輝の典輿館に入った¹⁶³⁾。張継庚はその遺稿の中で、南京入城後の太平天国について次のように語っている。

賊は入城した後、老弱強壯を論ぜず、みな聖兵となるように迫った。金銀衣服を論ぜず、みな聖庫に納めさせた。また男女を分けて二館とし、男營、女營と名づけた。あるいは二十五人を一營、あるいは五十人を一營とし、広西、湖南の男女賊首に統率させた。淫行を戒めること甚だ厳しく、姦を犯した者は立ちどころに斬った。その兵になることを望まない者、館に入るのを嫌がる者は全て殺し、このため死者は万人を数えた。後に賊は男子に船に乗るように命じ、万人が南門を出たが、みな水に身を投げ、城に戻ってきたのは九十三人だけだった。ああ、何と悲惨なことか！

その後彼らは偽王府を建造し、男女にレンガを運ばせ、廟を壊して濠を作らせ、陣地を作って仕事をさせた。人が少しでも手を休めれば鞭で打たれた。工事は二月に始まり、十一月の今になってもまだ終わらない。毎日男子は米一升、女子は米三合を支給したが、やがて精米していない穀が半升に変わった。その暴虐ぶりは言うに忍びないものがある¹⁶⁴⁾。

ここからは張継庚が男女の隔離や徴兵、財産の公有化、王府造営の工事など、太平天国の強圧的な措置に強く反発した様子が窺われる。それは南京住民の多くに共通する反応だったと考えられる。

やがて太平軍將兵に知人が増えた張継庚は、水軍の湖南人將兵と東王府の兵の間に不和があることを知った。彼が「東王は広西人を厚遇し、湖南人を冷遇している」と説いたところ、湖南兵は「煽動結盟」して江南大營に投じることを願った¹⁶⁵⁾。そこで6月に張継庚は同志の金和、李鈞祥、何市孟に江南大營を訪ねて出兵を要請させたが、翼長の馬竜は信用しようとしなかった。金和らは城外で郷勇5,000名を集め、清軍の攻撃を支援しようとしたが、食糧が続かず解散した。また城内でも内応計画は発覚し、800人余りが殺された。幸い張継庚は「葉知法」という偽名を使っていたために追及を免れたという¹⁶⁶⁾。

9月に城内のムスリムで江南大營に投じた者がいると聞いた張継庚は、古くからの隣人で「教門」の宛正竜らと相談し、向榮に宛てた書信を届けさせた¹⁶⁷⁾。また同じく城内で内応工作を図っていた呉復成と連絡を取った。

呉復成は南京出身の監生で、湖北漢口で緞子を商っていたが、南京に戻っていたところを

太平天国の南京占領に遭遇した。丞相の鍾芳礼が諸王の衣装や旗に用いる緞子を探していることを知った彼は、南京は織物業が盛んであり、元職人を集めれば生産が可能だと告げたところ、砂砾巷に機匠衙（織宮）が設けられ、呉復成は総制を命じられた。館内の将校はみな南京人で、「土紳や金持ちが多くここに隠れた」ために数千人が集まった¹⁶⁸。

9月に呉復成が秣陵関にいた江寧知府趙德轍に内応に関する手紙を送ると、向荣は呉復成と面識のあった胡恩燮（南京人）を部下と共に城内へ派遣した。また呉復成は織宮の他に染物を作る染坊、薪を売買する柴薪館などを設け、取引を口実にして城門を出入りする許可を取りつけた¹⁶⁹。

張継庚と呉復成は南京人だけでは計画は成功しないと考え、神策門、太平門、水西門などの城門を守る太平軍将兵に働きかけ、協力の約束を取り付けた。また東王府の牌刀手や土営、水営の将兵、南門の城外にいる守備隊にも言葉巧みに誘いをかけ、協力者は数千人にのぼった¹⁷⁰。

このように準備を進めた張継庚らは11月15日を決行日としたが、この日江南大営に動きはなかった。そこで期日を12月1日に改めたが、向荣はやはり動かなかった¹⁷¹。胡恩燮によると、焦った張継庚は翌2日にみずから江南大営を訪ね、「賊情について語り、ついで痛哭したため、軍中はみな感動した」という。そこで12月6日に民間人を装った兵を城北の神策門に送り、城外に待機した張継庚らと城内へ入ることにしたが、当日激しい雨が降って驚いた馬がいななき、異変を察知した守備隊が門を開けなかったために計画は失敗した。

元々張継庚らが提案した計画は、城の西南にある水西門、城北の神策門、太平門を開けて清軍を迎え入れるというものだった。だが水西門は8月に攻撃が失敗した旱西門に近く、向荣は「大営から道が遠く不便」であることを理由に難色を示した。神策門、太平門についても反応は同じで、向荣は最も警戒の厳しい城東の朝陽門を開けるように求めた¹⁷²。この頃向荣は江南大営の兵力が度重なる援軍派遣によって3,000名程度まで減ったと述べており、これ以上の兵が本陣を離れることに不安を抱いたと考えられる¹⁷³。

そこで張継庚らは朝陽門の守備を任されていた総制・恩賞丞相の陳桂堂（広西人）、軍帥張沛沢（湖南人）に働きかけることを決め、その部下である蕭保安、翁月峯（いずれも南京人）に説得を行かせた。陳桂堂らは「免死牌」と五品の官位を与えることを条件に、部隊700名を率いて投降することに同意した。そこで1854年に1月21日に計画を実行することになったが、清軍が日付を間違えたために未遂に終わった¹⁷⁴。ついで太平天国の正月にあたる2月4日を決行日としたが、再び伝達の遅れによって6日へ変更になった。すると2月5日に突然陳桂堂が七里洲の水営に移動を命じられ、7日に清軍が朝陽門外に至った時には城内から呼応する者がなく、計画は失敗に終わった¹⁷⁵。

このように失敗がくり返される中で、ついに内応計画は外部に漏れた。ある日、陳桂堂のもとに楊秀清の参護（護衛兵）が訪ねてきたところ、同志と勘違いした翁月峯が口を滑らせ、参護は張沛沢に問いただして実情を知った。参護が去った後、恐れた陳桂堂らは蕭保安

と相談し、まず翁月峯を城外へ逃がしたうえで、翌日朝に蕭保安が先手を打って韋昌輝のもとに自首した。

驚いた韋昌輝は徹底的に追及しようとしたが、この時蕭保安は「翁月峯が江南大営に投じたのは、妖魔の策略によるものだ。我々に隙がないのを見て、内応を謀って妖魔に役職を与えられた者が数千人にのぼるなどと言って、我らに同志討ちをさせ、その隙に乘じようとしたのだ。さもなければどうして翁月峯が逃げたというのか？」と述べて冤罪を主張した。これを聞いた韋昌輝は蕭保安の「無実」を認め、彼に褒美として監軍の職を与えたが、蕭保安は不安となって蓄電した。韋昌輝は欺かれたことに気づき、楊秀清に報告して翁月峯、蕭保安、葉知法（つまり張継庚）とその同調者を捕らえるように命じた¹⁷⁶⁾。

その後張継庚が南門一帯で活動していたところ、張沛沢と会った。張沛沢の部下は「奴が葉知法だ！」と言い、張継庚を捕らえて衛国侯黄玉崑のもとへ連行した。取り調べを受けた張継庚は、自分が所属していた典輿館に身元を照会させて内応工作への関与を否定したうえで、張沛沢はアヘン吸飲の禁令を犯しており、罪が発覚するのを恐れて自分を誣告したのだと主張した¹⁷⁷⁾。

いっぽう張継庚が捕らえられたことを知った呉復成らは、自分たちも捕らえられるのではないかと恐れた。そこで張継庚の様子を見に行った呉復成は、張継庚から一刻も早く事を起こすように促され、江南大営を訪ねて向榮と面会し、3月22日に神策門の内外で事を起こすことに決めた¹⁷⁸⁾。

決行の日が迫ると、向榮は田玉梅ら数人の「壮士」を城内へ派遣し、呉復成らの準備を手伝わせた。彼らは「好事人」の張丫頭など数十名で神策門の付近に潜伏し、守衛の兵を殺して門を開けようとした。しかし城門は内側から鎖のついた木柵で固定されており、これを動かすことも、鎖を壊すことも出来なかった。やむなく彼らは城楼ごと焼き払おうとしたが、風に阻まれて成功せず、太平軍兵士が集まってきたために逃亡した。

内応が失敗したことを知った胡恩燮は、急ぎ江南大営に戻って向榮に出兵を要請した。だがこの時孝陵衛に駐屯していた四川兵と貴州兵の間に「私闘」が発生し、七橋瓮にいた四川兵が加勢に向かおうとした。向榮は騒ぎを起こした兵数名を斬って事態を收拾したが、四川兵、貴州兵を派遣することが出来なくなり、代わって張国樑率いる広西人兵勇が神策門へ向かった。だがすでに太平軍は多くの兵を集結させており、張国樑は攻撃をあきらめて撤退した¹⁷⁹⁾。

こうして内応計画の存在が明るみに出ると、太平天国は関係者の摘発に本腰を入れた。機匠衙を初め各館で厳しい捜索が行われ、数百人が捕らえられた。彼らは館を統率する将校が身元引き受けに来ない限り赦されず、130名以上が処刑された¹⁸⁰⁾。張継庚に対する訊問も続いたが、彼は拷問を受けても黙秘を続けた。そこで太平天国は安徽廬州の攻防戦で太平軍に投降した元清朝知府の胡元煒に取り調べを命じた。

胡元煒の前に引き出された張継庚は、「貴官も江南の地方官だったからには、江南人が臆

病なことは知っているでしょう。老兄弟と共謀しない限り、誰が内応などするでしょうか」と述べ、太平天国官員の名簿を見せれば誰が協力者なのか告げると答えた。太平天国側はこれを認めず、胡元煒が覚えている人名だけでも言うように迫ると、張継庚は太平軍内の猛将や各王府の要員など34名の名前を挙げた¹⁸¹⁾。

この結果を韋昌輝が楊秀清に報告すると、楊秀清はこれらの者を即刻斬首するように命じた。しばらくすると楊秀清の伝令が慌ててやってきて、「張某の計略にはまったぞ！共謀者はみな親しく頼みにしている老兄弟ばかりで、どうして新兄弟がいないのだ？彼らを究問してはならぬ！」という楊秀清の言葉を伝えたが、すでに刑は執行された後だった¹⁸²⁾。結局真相はうやむやのまま、張継庚は処刑された。呉復成は翼王石達開が発行した身元証明書を手に入れ、仲間と共に城外へ脱出したという¹⁸³⁾。

こうして張継庚、呉復成らの内応工作は失敗した。結局江南大営は南京城を攻める手立てを見いだせなかったが、太平天国の統治が南京の住民に支持されていないことも明らかになった。1855年に入ると、太平天国は男女隔離政策を廃止するなど人々の不満を和らげる政策を実施したが、食糧の支給が逼迫する状態は続いた。江南大営とそこに集められた江浙地方の富を我が物としない限り、太平天国の安定的な統治はおぼつかなかったのである。

小 結

本稿は太平天国が南京占領後に行った首都建設と住民統治、清軍による江南大営の設立と内応工作について検討した。洪秀全は上帝ヤハウエの庇護のもと中国全土を統治する新王朝の君主として南京に入城し、ここに壮麗な王府を建てた。彼を補佐する楊秀清以下の諸王もそれぞれ王府を構え、世襲的な権威を認められた。それは永安州で作られた「諸王による共同統治」という原則を再確認したものだったが、南京到達後に楊秀清の権限が拡大すると、韋昌輝以下の諸王の権限は抑制されるようになった。

天京と改称された南京は、「兵営」という表現がふさわしい軍事的色彩の強い社会だった。人々は財産を没収されて家族と引き離され、男女それぞれ25名ずつの館に振り分けられた。男性の多くは軍へ編入され、女性も纏足を禁止されて陣地構築や食糧の運搬作業に動員された。また南京では様々な職人集団や物資の製造、管理を行う役所が設けられ、人々はそれぞれの技能に応じた部署に振り分けられた。中には織営のように兵役忌避を願う人々が集まった組織もあれば、老人や障害者を収容した館もあった。こうした役所や館は人々が生存する単位となり、人々は館ごとに衣服、食糧を支給されて共同生活を送った。

1853年当時、太平天国統治下の南京の人口は20万人を超えていた。太平天国は聖庫に米や没収した金品を貯蔵し、外地で入手した食糧を配給した。また南京近郊の商人から農作物などを購入して物資の供給を補完したが、まもなく備蓄は減少し、配給も滞るようになった。

太平天国統治下の社会を特徴づけたのは礼拝などの宗教儀礼であり、キリスト教の賛歌が

唱えられている光景に宣教師は驚きの声をあげた。この宗教儀礼は太平天国の滅亡まで一貫して行われたが、その内容には清朝の打倒や新王朝の正統性を訴える政治的内容が加えられた。また太平天国が熱心に行った宣伝、教化活動に講道理があり、老兄弟がみずから上帝信仰と勝利への信念、諸王と新王朝に対する忠誠を訴えたが、南京の人々の共感は得られなかった。

上帝会時代に始まった偶像破壊は南京到達後も引き続き行われた。儒教は排撃され、祖先祭祀や死者の埋葬などの習慣は変更されたが、やがて太平天国は対儒教政策を転換した。太平天国の人々を特徴づけた長髪は、その長さによって老兄弟、新兄弟の区別を示したが、髪が伸びるほどに清朝側に殺される危険も高まった。アヘン吸飲や飲酒、売春などは禁止されたが、実際には完全に根絶することは出来なかった。

さて太平軍を追撃して南京城外へ到達した向荣は、城の東側に江南大営を設けた。彼はここから南京の各城門へ攻撃をくり返したが、必ずしも効果をあげることは出来なかった。その第一の原因は兵力の不足であり、江南大営は水軍を持たなかったばかりか、2万人弱だった兵力も鎮江や上海など戦火が広がる度に救援を送ったため、城を包囲することは出来なかった。また将兵も広西から太平軍と戦ってきた貴州、湖南兵や広西、広東の兵勇が中心で、指揮官共々「負け慣れた」軍隊であり、戦局を大きく変える力量を持ち合わせていなかった。

もっとも清軍の規律の悪さは、補給体制の不備によって給与の欠配が続いたことも原因の一つだった。南京到達後、清朝は南昌や蘇州に総糧台を置き、中国で最も豊かな浙江、江蘇の税収や広東の税関収入などで江南大営の軍糧をまかなおうとした。途中輸送が滞った時期はあったものの、全体として見れば補給体制は改善され、江南大営の兵士の給与はその後登場する湘軍兵士と比べても高かったという。この頃清朝中央の意図はあくまで長江以北の防衛強化にあり、咸豊帝の性急な命令とは裏腹に南京の奪回などは望むべくもなかったが、向荣と江南大営は様々な制約の中で現状維持と太平天国の牽制に努めたというべきだろう。

こうした中、江南大営の清軍が努めたのは内応工作を進めることだった。たまたま南京には張継庚、呉復成など太平天国の統治に不満な人々がおり、彼らは織営の南京住民だけでなく、湖南出身の水軍兵士や広西の老兄弟にも同志を募り、協力を約束させた。その数は本人たちによれば数千人に及んだという。誇張があるとはいえ、「小天堂」であった筈の南京到達後も人々に犠牲と忍耐を求めた太平天国の手法が人々の反感を招いていたことは間違いない。

彼らの内応計画はたびたび失敗に終わり、ついに太平天国側の知るところとなった。張継庚は清軍の攻撃を急がせたが、清軍将兵の内紛もあって攻撃は失敗した。この時楊秀清は張継庚が「同志」として名前をあげた老兄弟をすぐさま処刑する誤りを犯したが、太平天国の公式文書にはこの過失を認める記述は一切見られない。むしろ事件が発覚した1854年3月、太平天国は夫婦密会を指弾された陳宗揚らの処罰をめぐって紛糾していた。少なくとも

この事件を永安州での周錫能事件のように「天父（つまり楊秀清）の全知全能ぶり」を讃える物語に書き換える余裕はなかったと言うべきだろう。

広西での蜂起前後、あるいは南京への進撃途上で見られた熱狂的な「革命」への期待感とはおよそ異なる太平天国の抑圧的な統治と、それに対する人々の冷やかな反応は、その後も南京の太平天国に深刻な問題を引き起こした。それは暴力によって打ち立てられた王権に共通する正統性の欠如がもたらした産物だったのだろうか。この点については揚州、鎮江における太平天国の戦いと共に稿を改めて論じることにはしたい。

註

- 1) 菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』汲古書院、2008年。同『金田から南京へ—太平天国初期史研究』汲古書院、2013年。同『北伐と西征—太平天国前期史研究』汲古書院、2017年。
- 2) こうした見解については小島晋治『太平天国運動と現代中国』研文出版、1993年および夏春濤『天国的陨落—太平天国宗教再研究』増訂版、中国人民大学出版社、2016年を参照のこと。
- 3) 太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編』鳳凰出版社、2018年。この史料集はかつて出版が途中で終わった太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』（全6冊、中華書局、1961年）の不足を補うもので、その目録によって存在が知られながら、見ることの出来なかった史料を多く含んでいる。南京および江蘇に関する部分は第14冊から17冊までで、本稿では必要に応じてこの史料集に基づいて註記することにした。
- 4) 張汝南『金陵省難紀略』（中国近代史資料叢刊『太平天国』4、神州国光社、1952年、694頁）。
- 5) 向荣等奏、咸豊三年六月二十三日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』（以下『鎮圧』と表記）5、社会科学文献出版社、1993年、254頁。
- 6) 滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、638頁）。
- 7) 菊池秀明「反乱と色—太平軍の旗幟と衣装」『老百姓の世界』6（中国民衆史研究会編『老百姓の世界』6、研文出版、1986年）。
- 8) 滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、637頁）。また向荣は「楊逆又將督署附近民房一概拆毀、改為偽王府、周圍築牆、厚若城垣、高又過之、可以俯瞰城外。臣等於紫金山上遙見甚明。又聞該逆二月間、正在起造偽宮殿、因聞大兵趕到中輟、迄今尚未完工」と述べ、その規模は旧総督衙門をしのぐものであったことを伝えている（向荣等奏、咸豊三年六月二十三日『鎮圧』5、254頁）。
- 9) 張德堅『賊情彙纂』卷6、偽礼制、偽宮室（『太平天国』3、164頁）また臣下が許可なく入ることを禁じた字句は滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、611頁）、『金陵省難紀略』（『太平天国』4、713頁）にも見られる。
- 10) 張汝南『金陵省難紀略』紀賊據城後大略、賊首居止（『太平天国』4、706頁）
- 11) 滌浮道人『金陵雜記』には「其鳳門以内、皆係賊婦在內、以供洪逆役使……。其中婦女約有千百、如女丞相以至女牌刀手、美惡皆備」（『太平天国』4、637頁）とある。
- 12) 向荣等奏、咸豊三年六月二十三日『鎮圧』5、254頁。
- 13) 滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、628頁）。
- 14) 馬壽齡『金陵癸甲新樂府』造宮殿（『太平天国』4、737頁）。
- 15) 張德堅『賊情彙纂』卷6、偽礼制、偽宮室（『太平天国』3、164頁）。また同書卷3、偽官制、偽

朝内官には「賊中刑賞生殺、偽官升遷降調、皆（楊秀清）專決之、洪逆畫諾而已。所属銜繫東殿、凡吏戸礼兵刑工六部尚書、每部十二人、共七十二人、主分受偽官稟奏、封賞吏部、錢穀戸部、以下類推」（同書 102 頁）とあり、実質的な行政は東王府が行っていたと考えられる。これらの尚書は東殿丞相だった曾水源、曾釗揚の統率を受けたと思われるが、吏部一尚書の李寿春、吏部二尚書の侯謙芳は楊秀清の信任を受けて「機密事」の決定に参与し、その「權勢」は韋昌輝、石達開よりも上と言われた（巻 2、劇賊姓名下、同書 67、68 頁）。

- 16) 向荣等奏、咸豐三年六月二十三日『鎮庄』5、254 頁。
- 17) 滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、628、629 頁）。北王府は六部尚書が 6 名ずつの 36 名、翼王府は 1 名ずつ 6 名の尚書を置いていた（『賊情彙纂』巻 3、偽官制、偽朝内官、『太平天国』3、103 頁）。また向荣は脱出した住民の話として、「（石達開）專議賊党功罪賞罰。即在督署之北、設立銀庫、偽名聖庫、該逆踞守其中」と述べ、石達開が将兵の評価や聖庫の設立に関わったと報じている（向荣等奏、咸豐三年六月二十三日『鎮庄』5、254 頁）。
- 18) 後に蕭有和は洪秀全の信任を受け、洪秀全が出した上諭の中でも「和甥」と呼ばれて序列は洪仁玕や李秀成よりも上位にあった。西王府は現在太平天国歴史博物館となっている。
- 19) 馮雲山の長男である馮癸方は洪仁玕と共に広西へ向かったが、太平軍と合流を果たせず、1853 年に広州付近に潜伏していたところを捕らえられた。次男の馮癸茂も母親と共に捕らえられた。三男の馮癸華は 1852 年に宣教師ロバーツと共に上海へ至り、上海小刀会に迎えられたが、小刀会の敗北と共に消息不明となった（羅爾綱『太平天国史』巻 45、伝第 4、蕭朝貴、1,792 頁および巻 43、伝第 2、馮雲山、1,717 頁）。
- 20) 張德堅『賊情彙纂』巻 6、宮室によると燕王府は中正街昇平橋一带にあった（『太平天国』4、165 頁）。また秦日綱は天京事変での罪によって王位の世襲は行われなかったが、胡以晄の息子である胡万勝は幼豫王に封じられた（羅爾綱『太平天国史』巻 49、伝第 8、胡以晄、1,858 頁および 1,866 頁）。
- 21) 簡又文『太平天国典制通考』上、第一篇、天号考、猛進書屋、1958 年、34 頁。
- 22) 張汝南『金陵省難紀略』賊破城後大略（『太平天国』4、694 頁）。またノアの箱舟の例えをあげて、天父の怒りを招かないように人々に天父を拝むように求めたという。
- 23) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』（『太平天国』4、650 頁）。また李圭『金陵兵事匯略』巻 1 によると「賊既入城、詭言不殺人、有以土物入獻者、給以貢單、無相擾。人多信之、爭饋銀米牲畜菜蔬、取偽貢單榜於門。詎賊見單益搜索、以其不為備、私藏必多」とあり、進貢した後も財産を私藏していると見なされて搜索を受けたという（『太平天国史料匯編』14、鳳凰出版社、2018 年、6,117 頁）。
- 24) 張汝南『金陵省難紀略』賊破城後大略（『太平天国』4、695 頁）。
- 25) 李圭『金陵兵事匯略』巻 1（『太平天国史料匯編』14、6,117 頁）。
- 26) 張德堅『賊情彙纂』巻 8、偽文告下、賊館門牌印據船票船牌によると、初め門牌の制度はなかったが、1853 年 7 月に南京に清軍将兵が潜入したとの噂が立ち、韋昌輝の主導で始められたという。翌年には清軍と内応した人物の摘発のために用いられた。後に太平天国が地域支配を始めると占領地で家ごとに門牌を作成させた（『太平天国』3、237-240 頁）。また『金陵癸甲紀事略』によると、「殺賊之謀未泄、人能私自過館、其数尚難稽查。至是賊有門牌之設、以館長出名、統其下、月送冊於偽詔書、以核其数。調往他處及逃走者均註明」とあり、勝手に所属先を変更する者が多かったためにこの制度が始まったとしている（『太平天国』4、654 頁）。
- 27) 張汝南『金陵省難紀略』賊破城後大略（『太平天国』4、695 頁）。また謝介鶴『金陵癸甲紀事略』

は「城中男子十六歳至五十歳、謂之牌面、余為牌尾。牌面半使竄往上游、而逃走甚夥、不敷用、乃取牌尾館之老而健者、使上城頭打更、仍不敷用、雖老而病者、亦使上城頭打更、於是逃者益衆、而牌尾館人数僅三千人矣」とあり、南京の住民が必ずしも戦力とならず、逃亡者も多かったことがわかる（『太平天国』4、655頁）。

- 28) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』によると、これを「招衣」と言った（『太平天国』4、651頁）。
- 29) 滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、622頁）。
- 30) 張汝南『金陵省難紀略』賊破城後大略（『太平天国』4、695頁）。同書は「女營」の場所として西華門一帯を挙げている。だが『金陵雜記』は城北の蓮花橋から洪武街一帯と花牌樓、門樓橋など、城南の南門大街から内橋、城東は石橋新廊、武定橋、石壩街、軍師巷、東牌樓、狀元境、奇望街、承恩寺、王府園口、城西は三山街坊口から陡門橋、糯米巷、安品街東と前後街一帯など、数多くの地名を挙げている（『太平天国』4、623頁）。
- 31) 張德堅『賊情彙纂』卷4、偽軍制上、附諸匠營（『太平天国』3、139頁）。同書によると、この他に金鞞營（靴職人を集めた）、繡錦營（刺繡職人を集めた）、鐫刻營（版木を作る刻字匠を集めた）があり、「各營以指揮統之」という。
- 32) 張德堅『賊情彙纂』卷3、偽官制、偽朝内官には「総聖庫、総聖糧、正副又正又副各四人、典聖庫、典聖糧各自四人。另有総聖庫協理二人、分主庫藏糧米之出納」（『太平天国』3、101頁）とあり、典聖庫、典聖糧の他に総聖庫、総聖糧と呼ばれる官職があったとしている。どのような役割分担があったのかは不明で、『金陵雜記』は「逆匪等倉米、皆偽典出聖糧支放、或按月、或分旬給發」「偽聖庫（分踞城中各典之賊）、偽聖糧（分踞城中礮坊米店）」（『太平天国』4、613・617頁）と述べている。いっぽう左四軍正典聖糧だった陳玉成は湖北広済県で活動している。総聖庫、総聖糧が主として南京で聖庫、聖糧全体の管理や出納を指揮し、典聖庫、典聖糧はその下で各倉庫の管理に携わり、必要に応じて外地での物資や食糧の獲得を指揮したのかも知れない。
- 33) 張德堅『賊情彙纂』卷3、偽官制（『太平天国』3、101頁）。滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、617頁）。張汝南『金陵省難紀略』紀賊據城後大略、賊偽官名（『太平天国』4、708-709頁）。
- 34) 張德堅『賊情彙纂』卷4、偽軍制上（『太平天国』3、117頁）。
- 35) 滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、618頁）。また織營に多くの人数が集まったため、太平天国は突如これを分割し、屢々「調遣」して出征させたため、人数は4分の1程度まで減ったという。鍾芳礼は商人の出身で、その住居に「絲綾緞疋」を私蔵して豊かだった。彼は別に雜貨を製造する部署も設けたという（同書および謝介鶴『金陵癸甲紀事略』『太平天国』4、674頁）。
- 36) 滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、618頁）。李圭『金陵兵事匯略』卷1は太平天国が軍に編入した南京住民を鎮江、揚州攻撃に動員しようとしたところ、激しい抵抗が起り、事態を收拾するために鍾芳礼、周才大らに機匠館（織營のこと）、牌尾館（老人館や能人館のこと）を作らせたと述べている。同書によれば牌尾館が4万人、野菜を作る菜圃館が2万数千人を集めたという（『太平天国史料匯編』14、6,118頁）。
- 37) A Letter by the French Jesuit Missionary Fr Stanislas Clavelin, Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Report on the Taiping*, Canberra: Australian National University Press, 1982, p. 95.
- 38) 滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、631頁）。
- 39) 汪士鐸『乙丙日記』卷1に「賊入城……、砌城門使卑狹不容騎、不平行。城内外遍掘濠、城門外結營土垣、樵樓柵塹、皆七八重。濠深八九尺、其内徧密加竹籬、長三尺、広二寸、刻其上下……。城門内置砲二、守城者坐臥城關中」とある。
- 40) 滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、633頁）。

- 41) A Letter by the French Jesuit Missionary Fr Stanislas Clavelin, Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Report on the Taiping*, p. 107.
- 42) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』（『太平天国』4、655・659頁）。また『張繼庚遺書』上向師書一には「賊中人数、通共粵人九百余人、兩楚一万余人、江南三万余人、此係在偽天官丞相處、查月冊家冊者、婦女則僅余二十三万人」とあり、内訳は異なるものの総数で20数万人という数字を挙げている（『太平天国』4、764頁）。
- 43) 張德堅『賊情彙纂』卷10、賊糧、倉庫（『太平天国』3、278頁）。
- 44) 張德堅『賊情彙纂』卷10、賊糧、口糧（『太平天国』3、277頁）。
- 45) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』（『太平天国』4、656頁）。
- 46) 『張繼庚遺書』上向師書一（『太平天国』4、764頁）。なお後述する張繼庚の足跡から見て、この内容は1853年9月頃の状況を反映していると考えられる。
- 47) 張德堅『賊情彙纂』卷10、賊糧、倉庫（『太平天国』3、278頁）。
- 48) 『張繼庚遺書』上向師書一（『太平天国』4、764頁）。「密訪其費用之故、據聞入京捐官、或偽作大買壳、或挾資入營投效、其用心奸深可知、求於營中密查……。又聞賊用多銀買京報看、故城外虛實無不知」。また太平天国が京報を入手していたとすれば、北伐軍が直隸へ入った事実も太平天国側は把握していたと考えられ、なぜ北伐援軍の編制と出発が遅れたのかという新たな疑問を生むことになる。
- 49) 張汝南『金陵省難紀略』紀賊據城後大略（『太平天国』4、711頁）。また馬寿齡『金陵癸甲新樂府』領稻も「牌尾一館二十五人、十日領米一百八十斤、米將不足減之少。少之又少繼以稻」と述べている（『太平天国』4、732頁）。
- 50) 張汝南『金陵省難紀略』紀賊據城後大略（『太平天国』4、716頁）。また謝介鶴『金陵癸甲紀事略』も北門橋に五市を設け、人々に城外へ出て物資を購入することを禁じたが、五市の商品の値段が騰貴したため、古參兵たちも不便に感じたため廃止になったと述べている（『太平天国』4、663頁）。
- 51) 張德堅『賊情彙纂』卷7、偽文告上（『太平天国』3、215頁）。
- 52) A Letter by Rev.W H Medhurst, North China Herald, 26 November 1853, Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Report on the Taiping*, p. 88.
- 53) 馬寿齡『金陵癸甲新樂府』作壳買（『太平天国』4、740頁）。
- 54) An Account by the American Methodist Episcopalian missionary Dr. Charles, Taylor, Charles Taylor MD, Five years in China (Nashville, 1860), pp. 339-360, Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Report on the Taiping*, p. 67.
- 55) 例えば謝介鶴『金陵癸甲紀事略』はこれと同じ内容の賛歌、後述の変更後の賛歌の双方を載せている（『太平天国』4、652・661頁）。
- 56) 張德堅『賊情彙纂』卷9、賊教、礼拝（『太平天国』3、261頁）。またもし三週間経ってもこれらの内容を暗誦出来ない場合は斬首されたとある（同書卷8、偽文告下、偽律諸条禁、『太平天国』3、229頁）。
- 57) 張德堅『賊情彙纂』卷7、偽文告上、覃瑞容稟および同書卷10、賊糧、口糧（『太平天国』3、216頁・278頁）。
- 58) 『頒行曆書』三年（『太平天国』1、171頁）。
- 59) 張德堅『賊情彙纂』卷8、偽文告下、偽律諸条禁（『太平天国』3、228頁）。また謝介鶴『金陵癸甲紀事略』（『太平天国』4、658頁）。

- 60) 頂天侯秦日綱等頌賛、羅爾綱・王慶成主編、中国近代史資料叢刊続編『太平天国』（以下『続編太平天国』）3、広西師範大学出版社、2004年、10頁。
- 61) A letter, dated 5 June 1854, giving another account of the Susquehanna visit, by the American Presbyterian missionary Rev.M.S.Culbertson; from Home and Foreign Record, Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Report on the Taiping*, p. 144.
- 62) 夏春濤『天国的隕落——太平天国宗教再研究』増訂版、中国人民大学出版社、2016年、165頁。
- 63) 礼拝に遅刻したり不真面目な態度を取った者は鞭打たれ、理由なく三度欠席した者は首を斬られた。また講道理に遅れた者は首かせと鞭打ちの刑を受け、再犯の場合は殺された（張徳堅『賊情彙纂』巻9、賊教、礼拝および同書巻8、偽文告下、偽律諸条禁 [『太平天国』3、262・229頁]。）
- 64) 東王楊秀清答覆英人三十一条並質問英人五十条詰諭（太平天国歴史博物館編『太平天国文書彙編』中華書局、1979年、301頁に「天朝凡講天情道理者、皆是官長依聖詔所宣也」とある。
- 65) 馬寿齡『金陵癸甲新樂府』講道理（『太平天国』4、736頁）。
- 66) Fishbourne, E.G. *Impression of China and the Present Revolution, Its Progress and Prospects*, London, 1855, V, p. 183.
- 67) 馬寿齡『金陵癸甲新樂府』講道理（『太平天国』4、736頁）。
- 68) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』（『太平天国』4、650・677頁）。
- 69) 張汝南『金陵省難紀略』紀賊據城後大略（『太平天国』4、696頁）また馬寿齡『金陵癸甲新樂府』敬天父も同じ言葉を載せている（同書736頁）。
- 70) 佚名『金陵紀事』（『太平天国史料匯編』14、6,270頁鳳凰出版社、2018、太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』2、中華書局、1961年、45頁）。
- 71) 馬寿齡『金陵癸甲新樂府』拆妖廟（『太平天国』4、734頁）。また夏春濤『天国的隕落』179頁によると、金属製の仏像は溶かして武器の製造に用いられたという。
- 72) Fishbourne, E.G., *op. cit.*, V, pp. 175-176.
- 73) 馬寿齡『金陵癸甲新樂府』禁妖書（『太平天国』4、735頁）。
- 74) 張汝南『金陵省難紀略』洪賊改字刪書（『太平天国』4、719頁）。
- 75) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』には「至祭祀祖先、俱為妖」「逆賊出偽示、死不用棺、用[則]為妖。香火不設、設[則]為邪……。死為昇天、為喜事」とある（『太平天国』4、654・658頁）。
- 76) 張徳堅『賊情彙纂』巻8、偽文告下、偽律諸条禁に「凡軍中兵士無故昇天、亦是好事、所有昇天之人、俱不准照凡情歪例、私用棺木、以錦被綢縵包埋便是」とある（『太平天国』3、229頁）。また『天条書』初版本には「作喪事不可做南無」とある（『太平天国』1、83頁）。
- 77) 現存する太平天国期の墓碑は少ないが、余成用墓刻（1854年）、王久年墓刻（1858年）はいずれも死者の名前と時期、埋葬場所あるいは墓を立てた人名を刻んだ簡略なものである。ただし後期の梯王練業坤の墓碑（1863年）は息子や孫、姪、姪孫など多くの親族の名を併記しており、伝統的なスタイルに近い（『太平天国』2、882頁）。
- 78) Lindley A.F., *Ti-Ping Tien-Kwoh; The History of the Ti-ping Revolution, Including a Narrative of the Author's Personal Adventures*, vol. 2, London: Day & Son (Limited), 1866, pp. 67-68・80（増井経夫、今村与志雄訳『太平天国——李秀成の幕下にありて』第1冊、平凡社東洋文庫、1964年、88頁）。
- 79) 祁窩藻奏、咸豊三年四月初四日 附件二、訪問江寧股衆情形单『鎮圧』6、283頁。
- 80) 『向榮奏稿』巻20（『太平天国』8、660頁）。また『張継庚遺稿』によると、清軍は「於賊頭不足之時、間有殺田間男婦以湊数」と付近の住民を殺して数合わせをすることがあった。この時髪が短くては意味がなく、女性が狙われることが多かったという（『太平天国』4、773頁）。以上

- は竜盛運『向荣時期江南大営研究』社会科学文献出版社、2011年、162頁を参照のこと。
- 81) 馬寿齡『金陵癸甲新樂府』易服色に「初破城、即下教、女子去裙男去帽」とある（『太平天国』4、737頁）。
 - 82) 菊池秀明「反乱と色—太平軍の旗幟と衣装」『老百姓の世界』6、1986年。
 - 83) 勸人戒鴉片煙詔、太平天国癸好三年四月（太平天国歴史博物館編『太平天国文書彙編』40頁）。
 - 84) 張德堅『賊情彙纂』卷8、偽文告下、偽率諸条禁（『太平天国』3、231頁）。
 - 85) 国宗提督軍務韋石革除汚俗禁娼妓鴉片黃煙誥諭（張德堅『賊情彙纂』卷7、偽文告上、『太平天国』3、224頁）。
 - 86) Fishbourne, E.G., *op. cit.*, V, p. 181.
 - 87) 『天父聖旨』卷3、乙榮五年六月十七日（『統編太平天国』2、332頁）。
 - 88) 張德堅『賊情彙纂』卷8、偽文告下、偽率諸条禁（『太平天国』3、231頁）。
 - 89) 東王楊秀清通令朝内軍中人等禁酒誥諭、太平天国甲寅四年五月（太平天国歴史博物館編『太平天国文書彙編』88頁）。また馬寿齡『金陵癸甲新樂府』禁煙酒（『太平天国』4、734頁）。
 - 90) 国宗提督軍務韋石革除汚俗禁娼妓鴉片黃煙誥諭（張德堅『賊情彙纂』卷7、偽文告上、『太平天国』3、224頁）。
 - 91) 張德堅『賊情彙纂』卷8、偽文告下、偽率諸条禁（『太平天国』3、232頁）。
 - 92) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』（『太平天国』4、659頁）。
 - 93) 張汝南『金陵省難紀略』紀賊據城後大略（『太平天国』4、716頁）。
 - 94) 東王楊秀清勸告天京人民告諭、太平天国甲寅四年四月（太平天国歴史博物館編『太平天国文書彙編』114頁）。
 - 95) 向荣奏、咸豐三年二月十七日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』（以下『鎮圧』）5、254頁。
 - 96) 向荣奏、咸豐三年二月二十日『鎮圧』5、298頁。
 - 97) 許乃釗奏、咸豐三年二月二十二日『鎮圧』5、313頁。また向荣も二月二十日の上奏で「城内籌防滿兵与綠營兵勇時有不和」であり、それが南京の陥落につながったことを示唆した（『鎮圧』5、298頁）。
 - 98) 軍機大臣、咸豐三年二月二十八日『鎮圧』5、395頁。
 - 99) 向荣奏、咸豐三年三月初二日『鎮圧』5、436頁。
 - 100) 向荣奏、咸豐三年二月十七日、附軍營官兵壯勇数目清單『鎮圧』5、252頁。
 - 101) 諭内閣、咸豐三年二月十九日・三月初八日『鎮圧』5、272・503頁。
 - 102) 諭内閣、咸豐三年二月初四日『鎮圧』5、40頁。
 - 103) 向荣奏、咸豐三年三月初九日『鎮圧』5、522頁。
 - 104) 向荣奏、咸豐三年三月十二日『鎮圧』5、561頁。
 - 105) 向荣奏、咸豐三年三月十六日『鎮圧』6、18頁。ここで向荣は「鍾山前後五營一齊火起」と述べ、また捕虜の供述として「鍾山各營之賊自知万不能守、隨即連夜自行焚燬」と記している。だが彼は8月の攻撃で「竜脖子」の太平軍陣地を攻撃したと述べており、太平軍は天堡城、地堡城を手放さなかったと見られる（同奏、咸豐三年七月二十七日『鎮圧』9、27頁）。なおこの二つの陣地について『張繼庚遺稿』上向帥書二の「城外如紫金山、龍脖子、只有二賊營、皆係湖北人守之、共四百人」（中国史学会主編、中国近代史資料叢刊『太平天国』神州国光社、1952年、4、768頁）と記している。
 - 106) 向荣等奏、咸豐三年四月十三日『鎮圧』6、385頁。
 - 107) 向荣等奏、咸豐三年四月二十三日『鎮圧』6、533頁。

- 108) 向荣奏、咸豊三年三月初九日『鎮庄』5、522頁。
- 109) 向荣等奏、咸豊三年四月初三日・十三日『鎮庄』6、276・385頁。
- 110) 向荣等奏、咸豊三年四月二十三日『鎮庄』6、533頁。
- 111) 向荣等奏、咸豊三年五月十六日『鎮庄』7、179頁。
- 112) 向荣によると、長江を進撃中の彼の軍には水上戦闘に不可欠な砲船が数隻しかなかった（向荣奏、咸豊三年二月十七日『鎮庄』5、254頁）。その後許乃釗、彭玉雯と協議した向荣は「不如緩攻金陵、先從水上去其船隻」とあるように、太平軍の水軍に打撃を与えることを優先した（向荣等奏、同年三月二十五日『鎮庄』6、151頁）。
- 113) 向荣等奏、咸豊三年七月初八日『鎮庄』8、405頁。
- 114) 向荣等奏、咸豊三年七月二十七日・八月十五日『鎮庄』9、27頁・265頁。
- 115) 諭内閣、咸豊三年三月二十二日『鎮庄』6、93頁。
- 116) 軍機大臣、咸豊三年五月二十二日『鎮庄』7、287頁。
- 117) 向荣等奏、咸豊三年七月二十七日『鎮庄』9、27頁の硃批部分。
- 118) 軍機大臣、咸豊三年三月初九日『鎮庄』5、515頁。
- 119) 向荣奏、咸豊三年三月十二日『鎮庄』5、562頁。
- 120) 向荣等奏、咸豊三年四月初三日『鎮庄』6、276頁。その後鄧紹良は南京へ呼び戻され、雨花台の攻撃などに参加したため、江南大営から鎮江への援軍は5,200名となった（向荣奏、同年七月十九日の附金陵鎮江東壩各營兵勇實數清單『鎮庄』8、567頁）。
- 121) 向荣等奏、咸豊三年五月二十二日『鎮庄』7、293頁。同奏、同年六月初八日、同書547頁。これらの上奏によると、山東、河南に向かったのは総兵瞿騰竜率いる兵2,000名、南昌へ赴いたのは総兵音徳布の兵1,200名とある。
- 122) 向荣等奏、咸豊三年六月十五日『鎮庄』8、24頁。また和春は12月に徐州へ向かうように命じられ、さらに西征軍が廬州攻撃を始めると廬州の救援に向かった（向荣奏、同年十月二十七日『鎮庄』11、12頁および和春奏、同年十一月二十八日、同書368頁）。
- 123) 向荣奏、咸豊三年七月十九日、附金陵鎮江東壩各營兵勇實數清單『鎮庄』8、567頁。
- 124) 向荣奏、咸豊三年七月十九日『鎮庄』8、566頁。
- 125) 向荣等奏、咸豊三年八月二十三日『鎮庄』9、403頁。また旗人で署江蘇按察使の吉爾杭阿も小刀会の鎮庄に向かった。
- 126) 向荣等奏、咸豊三年十月初十日『鎮庄』10、467頁。元々向荣はここに広東兵、福建兵を派遣していた。また彼は安徽、江蘇、浙江省境の棚民が太平天国に呼応しないように管理を強化すべきことを訴えた（同奏、咸豊三年五月十六日『鎮庄』7、186頁）。
- 127) 軍機大臣、咸豊三年十月初一日『鎮庄』10、356頁。
- 128) 向荣奏、咸豊三年十月十三日『鎮庄』10、508頁。
- 129) 向荣奏、咸豊三年十二月二十四日『鎮庄』12、13頁。
- 130) 向荣奏、咸豊三年三月十三日『鎮庄』13、236頁。なおこの上奏で向荣は「臣現帶之兵計存六千數百名、其中奮勇實能打仗者既屬無多、而節次陣亡養傷養病者時復不少。即如原調之四川屯兵千名、今只余四百有零、大半疲乏、不能出隊。又広東南韶、三江等營兵一千二百名亦不甚得力」と深刻な兵力不足に陥っていると述べたうえで、広東潮州、福建漳州などの兵数千名を江南へ派遣するように求めた。
- 131) 向荣奏、咸豊三年二月十七日、附軍營官兵壯勇數目清單『鎮庄』5、252頁には「遊擊長桂管帶広東潮州兵勇六百名、行調尚未到營」とある。また『向荣奏稿』巻10、請飭広東嚴禁潮勇出境

- 片（咸豊五年九月二十四日）によると、潮勇は「性多獷悍、往往滋事擾民」であるだけでなく、毎月の「口糧」も他の壮勇に比べて多く、経費がかかるため、向荣は九江で6,000名を「撤遣」した。しかし南京到達後、鎮江で職捐道員劉廷瑛が潮勇を組織すると、「潮勇紛紛來營投募」であったという（『太平天国』8、501頁）。
- 132) 李瑞は貴州兵を率いて広西へ派遣されたが、告発を受けて革職鞫問の処分を受けた。太平軍が鎮江を占領すると、向荣は彼に常州を守備させたが、城を放棄しようとしたために遊撃に降格となり、次いで解任された（『向荣奏稿』巻2・巻5、『太平天国』7、82・93・233頁）。
- 133) 解任処分を受けた余万清が江南大營に到着すると、向荣は彼を鎮江へ派遣して守備を任せた。余万清は「頗能激励兵勇、弔死問病、与同甘苦、又出己資以充賞恤、是以人皆樂為之用」とよく將兵を統率した（『向荣奏稿』巻5・巻7、『太平天国』7、238・354頁）。
- 134) 福興の功績は広東の天地会首領だった馮子材らを壮勇に編入し、戦線へ連れてきたことにあった。向荣は馮子材ら「広東三勇」の統率者として福興を評価し、彼を翼長に任命した（向荣奏、咸豊四年八月二十六日『鎮圧』15、494頁および諭内閣、同年九月初四日、同書534頁）。また旗人であった福興は署江寧將軍、西安將軍を歴任したが、湘軍首領たちの彼に対する評価は厳しかった（竜盛運『向荣時期江南大營研究』社会科学文献出版社、2011年、51頁）。
- 135) 向荣奏、咸豊三年正月十七日『鎮圧』4、438頁。
- 136) 軍機大臣、咸豊三年正月二十三日『鎮圧』4、544頁。
- 137) 張芾奏、咸豊三年正月二十六日、附江西設局辦理軍需款項章程清單『鎮圧』4、592頁。
- 138) 張芾奏、咸豊三年三月二十六日『鎮圧』6、193頁。向荣奏、咸豊四年閏七月十二日『太平天国』7、327頁。
- 139) 向荣等奏、咸豊三年六月初五日『鎮圧』7、499頁。また西征軍の南昌攻撃が始まると、江西を経由していた各省の軍餉は直接江南大營に送られた（張芾奏、咸豊三年六月二十五日『鎮圧』8、207頁）。また糧台も安徽の太平、寧国へ移った。
- 140) 向荣等奏、咸豊四年正月二十日『鎮圧』12、319頁。
- 141) 向荣奏、咸豊四年閏七月初五日『鎮圧』15、179頁。葉名琛奏、咸豊四年五月二十四日『鎮圧』14、434頁。
- 142) 怡良奏、咸豊三年十二月二十七日、附蘇州藩庫動解各處軍饗清單『鎮圧』12、105頁。
- 143) 怡良奏、咸豊三年七月十二日『鎮圧』8、469頁および軍機大臣、同年七月十八日、同書545頁。
- 144) 『籌辦夷務始末・咸豊朝』2、中華書局、2014年、478頁。
- 145) 向荣奏、咸豊三年十二月初八日『鎮圧』11、467頁。また軍機大臣、同年十二月十六日、同書562頁。
- 146) 向荣奏、咸豊五年十月初三日『向荣奏稿』巻10（『太平天国』8、515頁）。
- 147) 王茂蔭奏、咸豊四年十二月十八日、附江蘇省各地所設捐局清單『鎮圧』16、584頁。なおここで王茂蔭は捐局の中には私腹を肥やす弊害も多く、整理が必要であると指摘したうえで、江北の捐局は揚州の江北大營を、江南の捐局は鎮江の軍營の軍餉を送るように求めた。また向荣は鎮江に派遣された余万清が三江口に得勝官局を設けて成果をあげたと報じた（咸豊四年十月初三日『向荣奏稿』巻8、『太平天国』8、386頁）が、王茂蔭はこれを江北の江都県に置かれたと記している。
- 148) 怡良等奏、咸豊五年正月二十二日、農民運動類8509-19号、中国第一歴史檔案館蔵。また怡良奏、同年三月二十四日、農民運動類8509-30号。同奏、同年十月初五日、宮中檔咸豊朝、40606581 附片1号、国立故宮博物院蔵。これらの上奏には金陵軍營に必要な餉銀が多く、現在

湖墅関で徴税した1万両を蘇州の藩庫に送ったことが記されている。ただ残念ながら『清政府鎮圧太平天国檔案史料』は咸豊五年分以降の収録史料が大幅に圧縮されたため、系統的に検証するのは難しい。

- 149) 吉爾杭阿奏、咸豊五年二月初一日『鎮圧』17、72頁。また竜盛運『向荣時期江南大営研究』社会科学文献出版社、2011年、146-7頁。
- 150) 向荣奏、咸豊五年二月二十四日『向荣奏稿』巻8（『太平天国』8、432頁）。
- 151) 竜盛運『向荣時期江南大営研究』138頁。
- 152) 向荣等奏、咸豊三年四月二十三日『鎮圧』6、536頁。
- 153) 張集馨『道咸宦海見聞録』中華書局、1981年、172頁。
- 154) 『天父聖旨』巻3、甲寅四年八月二十四日（羅爾綱・王慶成主編、中国近代史資料叢刊統編『太平天国』2、広西師範大学出版社、2004年、330頁）。
- 155) 張集馨『道咸宦海見聞録』171頁。
- 156) 『烏蘭泰函牘』18（『太平天国』8、707頁）。
- 157) 向荣等奏、咸豊三年三月二十五日『鎮圧』6、153頁。
- 158) 向荣奏、咸豊三年八月二十三日『鎮圧』9、404頁。
- 159) 向荣等奏、咸豊三年九月十一日『鎮圧』10、104頁。
- 160) 向荣等奏、咸豊三年九月二十五日『鎮圧』10、291頁。
- 161) 向荣奏、咸豊三年十一月二十五日『鎮圧』11、330頁。
- 162) 『張繼庚遺稿』張繼庚伝（『太平天国』4、755頁）。
- 163) 『張繼庚遺稿』張繼庚伝および張汝南『金陵省難紀略』内応未成大略（『太平天国』4、755頁、700頁）。『金陵省難紀略』は張繼庚が韋昌輝の典興館で「教娃仔」したとあるが、張繼庚自身は「幸賊不知係讀書人、故得免受偽職、逼偽試等事」と述べており、將校子弟の教育を引き受けたかどうかは不明である（『張繼庚遺稿』致祁公子書、『太平天国』4、761頁）。
- 164) 『張繼庚遺稿』致祁公子書（『太平天国』4、760頁）。
- 165) 水軍の湖南兵と東王府の対立について、張汝南『金陵省難紀略』はさらに踏み込んだ説明をしている。初め太平天国は湖南、湖北の船を徴用した時に、「天王が小天堂に到着すれば天子となる。その時官となることを望まない者はすぐに帰郷できる」と約束した。また彼らの船には家族も乗っており、水軍については男女別営を行わないことを認めた。ところが南京に到着すると先の約束を反故にし、男子は上官と共に帰営させ、女子と老人、子供は館に編入した。また彼らの船を用いて揚州を攻撃し、船に載せていた財産を全て没収した。水軍兵士が失望して恨み言を言うと、謀反の可能性があると伝えられ、楊秀清は慌てて彼らを慰諭したが、湖南兵は納得しなかったという（『太平天国』4、699頁）。太平天国は民間船を徴用したが、その多くが水上生活者の船で、家族全員で船を操作していたため、男女を隔離できなかったというのはありそうな話である。
- 166) 『張繼庚遺稿』致祁公子書、『太平天国』4、762頁。この時張繼庚は葉芝発とも名乗っていた（張繼庚伝、『太平天国』4、755頁）。
- 167) 『張繼庚遺稿』致祁公子書、『太平天国』4、762頁。上向帥書一、『太平天国』4、762頁。ここで張繼庚は南京城内の人数について、広西・広東人が900人、湖広人が1万人、江南人が3万人、女性が23万人と述べている。また「城外賊營至多者不及千人、或四五百人、如朝陽最要、故稍多、其余如通済、則城上城下皆無人。水西門城外城上之営、現已可説明作内応」と述べ、太平軍陣地の人数や内応の可能性について報じている。

- 168) 張汝南『金陵省難紀略』内応未成大略（『太平天国』4、699頁）。
- 169) 胡恩燮『患難一家言』（太平天国歴史博物館編『太平天国資料叢編簡輯』2、中華書局、1962、342頁）。
- 170) 『張繼庚遺稿』致祁公子書（『太平天国』4、760頁）また王韜『甕牖余談』巻1、張繼庚小伝によると、張繼庚が太平軍將兵に対して「吾觀公輩勞苦矣！去鄉里、捐妻子、攻下十數城、然祿僅足自給、小有過失、朝夕不自保、以公等之才、顧不能謀一飽耶、何郁郁久居此也」と言葉をかけると、多くの者が黙り込み、涙を流す者もいた。そこで彼は江南大營の清軍は君たちが「良民」であると知って、手を出さずにいるのであり、「公等誠以此時率所部啓城、迎官兵入、斬六偽王、函首詣（向榮）軍門、不世之勲也」と言って内応に協力するように誘ったという。
- 171) 『張繼庚遺稿』致祁公子書、『太平天国』4、762頁。
- 172) 胡恩燮『患難一家言』（『太平天国資料叢編簡輯』2、344頁）。
- 173) 胡恩燮『患難一家言』（『太平天国資料叢編簡輯』2、349頁）。
- 174) 張汝南『金陵省難紀略』内応未成大略（『太平天国』4、701頁）。
- 175) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』（『太平天国』4、659頁）。
- 176) 張汝南『金陵省難紀略』内応未成大略（『太平天国』4、701頁）。
- 177) 張汝南『金陵省難紀略』内応未成大略（『太平天国』4、701頁）。胡恩燮『患難一家言』（『太平天国資料叢編簡輯』2、350頁）。この時張沛沢は發覺を恐れて内応工作者と縁を切っていたため、張繼庚を連行したようである。また張繼庚の告発を受けた黄玉崑らが張沛沢の身辺を捜査したところ、アヘンの吸飲器具が見つかった。張沛沢は死罪を問われたが、屢々軍功をあげていたために赦されたという。
- 178) 胡恩燮『患難一家言』（『太平天国資料叢編簡輯』2、351頁）。この間の経緯について、向榮は十一月二十五日の上奏以後何も報告していない。ただし已革知県成興は都統薩興阿に提出した「密探江寧賊情冒陳剿復各条」の中で「至城内被脅者、只泥瓦匠、木匠兩項人、早有内応之心。来匠斧柄裝長、泥瓦匠皆用鉄器。奈外応無人、不敢動手。此外又有回民、染業兩項人、被虐尤甚、亦欲内変。統計四項人、約有数万、綫因外無接応、飲恨自甘。若得告示入城、或密通消息、約以定期、懸以重賞、何患不濟？」と述べ、主として城外の清軍が呼応しないために内応工作が進まないと指摘している（薩興阿等奏、咸豊三年十二月初六日附片、農民運動類、8504-55号、中国第一歴史檔案館蔵）。
- 179) 胡恩燮『患難一家言』（『太平天国資料叢編簡輯』2、351頁）。ここで私闘が発生した原因は明らかではないが、1853年12月に江南大營にいた四川兵の熊鎮武らが、功績を評価されず、餉銀が支給されないことに不満を持ち、部隊を離れて「英聚堂」なる一隊を組織して、安徽で活動して学政孫銘恩の衙門におしかける事件が起きた（孫銘恩奏、咸豊三年十一月十九日『鎮匠』11、274頁）。これを調査した向榮の上奏によると、江南大營の周囲には「閑雜人」即ち清軍將兵の知人や同郷の者が物売り、壮勇、雇われ人夫として多く集まっており、その中にいる「滋事不法之徒」は陣地から離れた水西門、旱西門で太平軍と近隣の住民が交易をしているところを襲い、利益をあげていた（『向榮奏稿』巻5、咸豊三年十二月初八日、『太平天国』7、262頁）。兵糧が不足する中で、実力行使による物資獲得の風潮は容易に部隊間の対立や衝突を生んだと考えられる。
- 180) 『清史稿』巻493、列伝280、張繼庚、中華書局、1977年、13,630頁。
- 181) 胡恩燮『患難一家言』（『太平天国資料叢編簡輯』2、354頁）。
- 182) 『張繼庚遺稿』張繼庚伝（『太平天国』4、755頁）。謝介鶴『金陵癸甲紀事略』によれば、この時

犠牲になったのは翼殿尚書周北順（湖北人）、殿前左史鄧輔（虎？）廷（広西人）、国医劉春山（湖北人）、東試翰林嚴定邦（江西人）らであった（『太平天国』4、677・679頁）。

183) 胡恩燮『患難一家言』（『太平天国資料叢編簡輯』2、353頁）。